

サンフロント21 懇話会

〒410 沼津市魚町1番地
-8560 サンフロント5F
静岡新聞社・静岡放送
東部総局内
事務局
TEL 055・962・6520

2014.9.3 No.100

富士地区分科会

2月28日開催

開通から2年、新東名を富士地域の活性化につなげよう 「ビジネス・チャンス」テーマに基調講演とパネル討論

サンフロント21懇話会

富士地区分科会

静岡新聞 SBS



「サンフロント21懇話会」(代表幹事・岡野光喜スルガ銀行社長)は2月28日、第19回富士地区分科会を富士市のホテルグランド富士で開いた。約150人が参加して、2年前に開通した新東名高速道を生かした地域の振興策を物流や観光を切り口に探った。

主催者を代表して北村敏廣静岡新聞社代表取締役専務は「富士山南麓活性化のため新たな大動脈・新東名の活用に迫りたい」とあいさつし、開催地代表の小長井義正富士市長は「新東名を生かして富士市の課題を克服し、将来像を描いていきたい」と力を込めた。

基調講演の講師は日通総合研究所 経済研究部 担当部長 主任研究員の大島弘明氏。「新時代の人と物の流れ」と題して経済活動を支える物流を

取り巻く環境の変化を解説し、「人口の減少と大都市集中が進み、安全と環境の両面からコンプライアンスがますます重視されている。富士地域は新時代に対応する物流拠点整備などのポテンシャルが高い」と優位性を強調した。

「新東名沿線にビジネス・チャンスをつかめ」がテーマのパネル討論は着地型観光を手掛ける旅行会社レイライン(富士市)の小松みゆき社長、富士市長に就任して間もない小長井義正氏、基調講演を行った大島弘明氏が登壇した。静岡経済研究所理事(サンフロント21懇話会TESS研究員)の大石人士氏の進行で、新たな交通インフラ・新東名開通に伴う地域の変化や夢、課題を語り、地域の強みを生かした活性化につなげていく方策を考えた。

主催者代表あいさつ



静岡新聞社代表取締役専務

北村敏廣

サンフロント21懇話会の活動は本年度で19年目を迎えています。ソチ冬季五輪の女子フィギュアスケートでの浅田真央さんの渾身の舞には多くの皆さんが感動を受けたことと思います。極度の緊張感の中での巻き返しはどんな色のメダルにも勝る鮮烈な記憶とメッセージを残しました。大きな目標を持った人間は強いと改めて感じました。

私たちにも県東部地区の活性化という大きな目標があります。本日は富士山南麓の地域振興を大きなテーマとして新東名を取り上げます。物流、観光、防災とさまざまな視点からこの大動脈に迫りたいと思います。基調講演は日通総合研究所 経済研究部 担当部長 主任研究員の大島弘明様にお願いしました。演題は「新時代の人と物の流れ」です。パネル討論では先月、富士市長に就任したばかりの小長井義正様にも加わっていただきます。

皆様方の日ごろのご支援、ご協力に心より感謝申し上げますとともに、本日の分科会が岳南地区の一層の発展につながるものとなることを期待しております。

開催地・懇話会代表あいさつ

富士地区分科会を富士市で開催していただき、感謝を申し上げます。本日は場内いっぱいの参加者であり、多くの皆さんが熱意を持ってこの会にかかわっていることが分かりました。19年の長期にわたる継続した取り組みの原動力はこのような熱き思い、熱心な気持ちとご支援、ご協力のたまものであらうと敬意を表するところであります。

私も1月20日の初登庁からまだ1カ月ちょっとであり、平成26年度に向けての2月定例議会が開会中で代表質問、一般質問に備えて準備を進めているところです。新東名に関連しての物流や観光、防災といったことがテーマの分科会にパネリストとしても参加させていただくことになり、今の行政課題や私が描いている富士市の未来像などを紹介する機会を得たことを大変ありがたく思っています。

結びにサンフロント21懇話会がますます発展されますことを、そして皆様方のご健勝、ご活躍を祈念申し上げます。



富士市長

小長井 義正

基調講演

「新時代の人と物の流れ」

日通総合研究所 経済研究部 担当部長 主任研究員

講師 大島 弘明氏



平成以降顕著な貨物輸送量の減少 環境の変化と競争の激化

物流はおなじみの宅配便をはじめ皆様方の生活に深くかかわっています。つい先日の大雪では物流が滞ってスーパーやコンビニに物が届かないという事態が起き、物流がなくてはならないものだという認識を改めて実感されたかと思います。本日は物流を中心に、この地域のテーマでもあります新東名開通に伴う影響や効果として期待できるものは何かということについてお話しさせていただきます。中身は人と物の流れを取り巻く環境変化、人口減少と大都市への集中、人と物の流れの変化、安全と環境を中心としたコンプライアンス重視、そして東海地区のポテンシャルとビジネスチャンスを予定しています。

人と物を取り巻く環境の変化では、長期間の景気低迷により貨物輸送量は平成に入って以降ずっと減少が続いています。貨物輸送量の減少は物流事業者の仕事量の減少を意味します。輸送を頼む荷主さん側の産業界と同様に非常に厳しい競争下にあります。

一方でリードタイムの短縮やサービスレベルの向上を迫られてきました。例えば人が動く時、早くて安いからと長距離高速バスが使われるようになり、インターネットで買い物をする場合、東京なら昼前までに条件付きで注文を入れればその日のうちに手元に届くようになりました。コンビニのおにぎりやお弁当もすぐに補充され、長時間品切れということはほとんどありません。これすべて物流のなせる技というところで、サービスレベルの向上、消費者ニーズにいかに対応していくかを迫られている状況にあります。また常に競争相

手がいるわけですから、生き残りをかけたローコスト化の推進がますます重要になっています。このローコスト化とサービスレベルの向上が大きな要素といえるでしょう。

安全確保はよりハードル高く 人手不足が深刻化

少子高齢化の影響も受けます。物の輸送、人の流れの面でも輸送業者に求められる安全の確保はより大きく、よりハードルが高くなっています。トラック輸送業、バス業界に対する安全の規制は年々厳しくなっています。そうした中でいかに仕事をしていくか、商売をしていくか、大変厳しい時代に直面しています。安全や環境の規制を守り達成するためにはコストが発生します。お金がかかるのです。経営の判断、経営戦略にもかかわるものとなっています。

加えて人手不足の顕在化があります。人の流れと物流の両分野で起きています。バス業界はバスの運転手のなり手が少ない。特に少ないのが路線バスで高齢化も進んでいて困っているという話もよく耳にします。物流業界もなり手が少ない。景気に左右されるということではなく、構造的な問題になっていると思います。

深刻な人口減少 大都市圏への集中進む

人口の減少も深刻な問題です。これまでのように人や物が回数多く動いてくれればいいのですが、人でいえば動く人の数が減り、物の量でいえば消費する人の量が減ります。成長戦略という言葉がよく使われますが、昔のような右肩上がりはもう期待できないのではないかと。その上で次に何をす

るかを考える必要があるでしょう。

ここに国土交通省が2005年を基準に2050年までの間の人口増減を地図上に落とした予測図があります。見ると、東京を中心にした関東圏、名古屋を中心にした中部圏の増加が目立ちます。東京、名古屋と共に3大都市圏を成す大阪などの関西圏はあまり増えていません。どれだけ人口が集中していくかということ、3大都市圏とそれ以外の地域の比率が2005年過ぎのころはほぼ半々だったものが56%ぐらいに達し、東京への集中は現状の27%から32%ぐらいになると予測されています。人口減少下での大都市集中によって地域の過疎化が進みます。でも人は住んでいます。生活必需品など物の流れをどう確保していくか、宅配が成り立たない地域が出て来るかもしれません。既に山間過疎地では路線バスが消え、タクシーへの切り替えなど様々な対策が講じられていますが、コストの問題だけでなく人手不足、ドライバーの確保などがネックとして重くのしかかりつつあります。我々も危機感を持っています。

効果大のダブルネットワーク 新東名の通しは西から東

新東名開通の影響については中日本高速道路と国交省がまとめたデータがありますので紹介させていただきます。開通前と1年後を比較すると、全体の交通量が14%増えました。ただ旧東名から新東名に移行したところがあって旧東名の1日平均の交通量は7万3千台から4万3千台に減りました。振り分けられたということになります。これを物流の現場から見ると、数字的なデータはありませんが、例えば名古屋から東京に行くなど西から東へ通しで行く車はかなりの割合で新東名を使っています。皆さんご存知のように新東名は勾配や曲線が緩やかで走りやすい。トラックのドライバーからすると、自分の体に対する負荷が軽減され、事故の危険性も少ない。通しで走るときは走りやすい道路・新東名を利用する傾向にあります。一方で配達のために途中のインターで降り、再び高速道路に戻るトラックは旧東名を使っています。新東名は山側にあるので利便性が悪いということでしょう。これは東京から西に向かうトラックに多いようです。

いわゆるダブルネットワーク化の効果は混む時とそうでない時の時間のばらつき加減が交通量の

多い繁忙期で76分から22分と約3分の1に減りました。時間が読める、遅れが生じないというメリットを生んでいます。人の移動、物流ともにプラス α （アルファ）になっていると言えます。

労働条件改善へ厚労省も動く ドライバー不足が悩み

トラックの業界、物流業界の実情をあまりご存知ない方は「トラックのドライバーって厳しい仕事だけど稼げるんじゃないの」というイメージを持たれているかもしれません。実はそんなことはないという状況です。例えば労働時間ですが、道路貨物運送業は全産業計に比べ年間平均で400時間ぐらい長く、賃金も全産業平均が落ちている中で減ってきていまだに差があります。このように長時間労働で低賃金の職種にはなかなか人が集まってくれません。しかも危険だ、大変だというマイナスイメージが付きまとうので、若い人のなり手がなかなかいません。高齢化が進んでいて雇用延長しても65歳ぐらいでやめざるを得ない。若い人の補充が追いつきませんから、人手が足りないという状況になっています。

長時間労働を改善していくための指針として厚生労働省は労働基準法プラス α で改善基準を告示し、ルールを設けています。例えば拘束時間ですが、1日原則13時間、最大16時間以内に抑えてくださいというルールになっています。休息期間は一日の仕事が終わってから次の日の仕事始めまで8時間空けなさい、運転時間は一度も休憩なしに4時間以上連続して運転してはいけませんというルールです。実態はどうでしょうか。なかなか守られていないという声も聞きます。

これまで経済成長と貨物輸送量はほぼ比例すると見られていました。ところが貨物輸送量は減少を続けています。景気が良かったのに輸送量が減ったということも起きています。この先どうなるのか、春以降、賃金が上昇すれば少し我慢していたものを買おうかという気分になり、消費が活発化し一時的に貨物輸送量が増えるかもしれません。消費税増税前の駆け込み需要が起きた時、トラック業界はどうだったかということ、輸送需要はあるもののトラックが捕まらない、集まらない、ドライバーがいないという状態が一部で起きていました。私は減少傾向がこれからも続くと思っています。その大きな理由の一つは人口が減ることです。

す。人口が減れば消費量が減り、貨物の輸送量が減ることになります。もう一つは産業界、荷主さんの側からすると、物流コストはできるだけ下げたいわけです。そのためには無駄な輸送はしない、無駄な保管はしないという仕組みが求められ、物流の効率化が一段と進むのではないかと思っています。

貨物輸送の9割以上がトラック 輸送量のピーク過ぎる

貨物の動き、地域間や地域内でどう動いているのかを見てみましょう。2010年あたりの数字でいくと、関東地域内での流動が全体の21%ぐらいあります。当該地が含まれる中部地域内は13%です。地域間も含めてやはり人口の多い大都市圏を中心に動いています。関東、中部、近畿が大動脈ということになります。何で貨物を運んでいるかと言いますと、トラックが91.8%を占めています。他に船舶や鉄道がありますが、距離別で見ると100^{キロ}までは営業用、自家用を併せ90%以上がトラックです。輸送距離が1000^{キロ}を超すと船舶が増えてきます。富士地域は大消費地の関東、中部、近畿を控え、トラックの優先度がより高い地域といえるでしょう。ちなみにトラックの一回あたりの平均輸送距離は243^{キロ}です。

物流を取り巻く環境の変化で大きな要素は先ほども少しお話したように人手不足です。物流の効率化を進めましょうということとも関連するのですが、トラックもバスもドライバーが不足しています。ハローワークに求人票を出しても人が集まりません。この先、右肩上がりですます人が集まらなくなっていくでしょう。職業を選ぶ上での基準となる労働条件と賃金の改善が強く求められているわけです。

人の動きを示すデータに国土交通省が5年に1回行っている旅客流動調査というものがあります。人が動く代表交通機関は乗用車です。1990年から2010年までの間で見ると、ばらつきはあってもほぼ横ばいでした。人口減社会に移行してこの傾向が続くかという懸念を持ちます。これを地域、圏域で見ると、首都圏、中京圏、近畿圏の間での移動、首都圏から東京に向かう、中京圏は名古屋に、近畿圏は大阪にという移動が増えています。九州で言えば福岡に向けて動く。要は大都市に向かったの集中であり、大都市の位置づけがま

すます高まっているということになります。一方、貨物の輸送量は平成7、8年ごろがピークで、その後減っています。バブルがはじけた後、リーマン・ショックまでの間、プラス成長だったにもかかわらずです。

それから安全の問題があります。運送する側に対する規制が厳しくなりました。荷物を出す荷主さん側に対するルールも厳しくなっています。要は「無理なオーダーを運送事業者に出さないでくださいね」という時代になってきているということです。運送契約をきちんと書面で結ぶ、また引受書を発給して積み込みや荷卸しの日時、場所、運賃、燃料サーチャージ、付帯業務の有無、有料道路の利用料などを明確化する。今まではドライバーが長時間労働でカバーしていたことを少しでも改善していこうという流れになっています。役所側がこうした動きを見せる背景には、荷主さんの側にも協力してもらわないと労働条件の改善が進まない、人手不足が解消しない、安全が確保できないという考えを持つようになったからでしょう。この労働条件、ドライバーの労働条件を良くし、物流をしやすくする。そこにきちんと労働力が集まって皆さんの要望に応えられるようなものにするのが非常に大切だと思います。

変わらない物流ニーズ 効率化が大きなテーマ

これから先の物流、人流をどう考えたらいいのか、あるいは何が求められてくるのかということをし少し整理してみましょう。人にやさしい物流、あるいは人手が少なく済む物流、安全な物流、すぐに届く物流—こういったニーズはなかなか変えられないと思います。毎日コンビニに並んでいた物がもう並びませんというようなことは我々の生活を考えても受け入れられないでしょう。達成するためには今のコストでいいのか、新たな技術開発で補えるのか、よく考えていく必要があります。

物流の効率化ということでは、従来からのパターンはメーカーの工場で作られたものがメーカーの拠点に運ばれ、そして卸に運ばれ、小売業の物流拠点に運ばれ、小売店の店舗に届いたものを我々消費者が購入してきました。この仕組みをどう見直していくか、まず考えられるのは保管したり、輸送したりする経路をいかに減らすかとい

うことです。保管や輸送には必ずコストが発生し、そのコストは消費者の購入価格に乗っていますから、いかに減らしていくかを消費者側も求めています。物流効率化のテーマだと思います。

進む技術開発 実用レベルに近い無人隊列走行

物流を取り巻く環境の話をするとうとうでもネガティブなことが多くなってしまっていますが、こんなアイデア、研究・技術開発も進んでいるということで事例を紹介します。最近の車、特に高級車は自動車メーカーの技術開発によって安全のための様々なアシスト機能が付いています。トラックはというと、車1台に対してドライバーが必ず1人必要です。そこでトラックのドライバーをできるだけ少なく済ませる仕組みはないか、なおかつ事故の危険性も少なくしたい。そんな発想で国をはじめとして研究、技術開発を進めているのがトラックの隊列走行、あえて言えばオートパイロット、無人隊列走行です。安倍政権の成長戦略の中にも位置付けられていて検討が継続中の取り組みです。

例えば高速道路の1区間、1レーンをトラック専用、オートパイロット専用のレーンにして先頭車のみドライバー付きのトラックで後続車は無人で走行する。経済産業省を中心にした研究で昨年2月に自動隊列走行の実証実験がありました。車間距離4mで時速80km/h、単にカメラで追っているだけではなくて車車間通信というシステムを取り入れていて前の車が急ブレーキを踏めば、後続車もタイムラグなく急ブレーキが掛かる。車線変更ができる技術も備えています。実証試験では距離間が4mを超えていましたが、かなり実用化に近いレベルにまで来ています。国はどこで導入するかなどには触れていませんが、候補として挙げられるのは新東名、新名神あたりでしょう。高速道路でしか活用できない技術ですから。しかし高速から一般道に降りる時どうするのかなど課題はまだ残っています。時速80km/hでの定時走行が可能となればトラック業界に大変革をもたらします。新東名を生かすという意味では当該地にとっても魅力のある、注視したい技術開発ではないかと思っています。

新たな仕組みを可能にする中間拠点施設

最後に当該地のポテンシャルとビジネスチャンスについてお話します。トラックの長距離ドライバーの労働実態は例えば関東から乗って関西まで輸送する場合、荷物を降ろした後、新たに荷物を積み込んで戻ってきます。このドライバーは関西ではホテルに泊まらずトラックの荷台で寝ていることが多いようです。こうした負荷の大きい労働を緩和するためには、中間に拠点を設けてそこに荷物を降ろすなり、場合によってはドライバーが入れ替わって輸送するという仕組みが考えられます。関東から出たドライバーの中間拠点に位置付けられるのは中部です。中部で一度荷物を降ろし関東に戻っていく、または関西から来た荷物を載せていく、これをトレーラーでやれば後ろだけを付け替えればいいでしょう。こういうことができる拠点・施設が今のところあまりありません。私がお付き合いしている運送事業者さんからもい言ったような仕組みに変えていきたい、ドライバーが自宅で寝られるようにしたいという声をよく聞きます。でも新たな仕組みが可能になる中間拠点施設の規模や内容、立地となると難しい面があるともいえます。これがどれだけのビジネスチャンスかということそう簡単ではないというのが率直なところですが、こういうことによって安全を守りコンプライアンスを徹底して、物流の効率化を進めていくことができるのではないのでしょうか。運送事業者の自助努力でやるのが当然ではありますが、荷主さんの側にも運送業界の実情にご理解をいただくなど、皆さんの知恵を出し合って取り組み、地元にも少しでも還元ができればいいなあと思っているところです。

あまりなじみのない物流の話でどれだけ皆さんの参考になったか分かりませんが、物流業界の現実や話題を取り上げさせていただきました。

< 講師略歴 >

■大島 弘明 氏(おおしま・ひろあき) 1988年日通総合研究所(東京)入社。2003年経済研究部 担当部長 研究主査を経て、06年現職。トラック運送業界における事業環境の変化や労働・安全問題、物流効率対策などの調査研究に取り組む。東日本大震災後、緊急物資輸送の実態把握や物流業のBCP(事業継続計画)作成に向け、ガイドラインの策定などに携わった。著書に「交通工学ハンドブック」(共著)など。流通経済大学客員講師、中部トラック総合研修センター物流大学校講座講師なども務める。1964年東京都出身。



「新東名沿線に ビジネス・チャンスをつかめ」



〈パネリスト〉

小松みゆき氏(株レイライン代表取締役社長)

小長井義正氏(富士市長)

大島 弘明氏(日通総合研究所 経済研究部 担当部長 主任研究員)

〈コーディネーター〉

大石 人土氏(静岡経済研究所 理事 サンプロント21懇話会TESS研究員)

◆大石 新東名の開通からこの4月で2年になります。新たな交通インフラができて富士地区は何が変わったのか、あるいは変わろうとするきっかけがどれほどできているのか、これからどんなことが考えられるのかというテーマで議論を進めてまいりたいと思います。

まず先月、富士市長に就任されたばかりの小長井さんに口火を切っていただきます。つい最近、施政方針演説をされたそうですが、この富士市、富士地区をどのようにとらえていて、何をされようとしているのか。考えていること、思っていることをお話していただけますか。

市役所を課題解決型の組織に変える 重点は新東名周辺と田子浦港の活用

◆小長井 私が選挙戦を通じて市民、有権者の皆さんから託されたのは「富士市をかつての元気あるまちにしてほしい」「地域経済を何とかしてくれよ」ということだと受け止めています。まず目指す都市像を生涯青春都市としました。名刺にも付けています。26万市民すべてが生き生きと毎日を過ごしながら新しいことに挑戦するまちです。チャレンジする企業、事業所には行政もしっかりと応援し、富士市の建て直し・再建を図ってい

ます。市長は市の社長ではなく営業部長という考え方で、企業訪問も積極的に行います。従来 of 行政はどちらかといえば指導、規制が中心でしたが、私は課題解決型での対応に重きを置き、市役所全体を課題解決型の組織に変えていかなければならないと思っています。富士市で継続して企業活動が続けられるような環境整備に努めてまいります。

企業誘致は富士山フロント工業団地17区画のうち14区画が既に契約を終え、一部では操業が始まっています。残り3区画のうち2区画は具体的な話もありトップセールスを掛けたところですが、富士山の麓(ふもと)というロケーションの良さに対する評価は高く、紙とかお茶といった地元の産業と自分たちのノウハウを結びつけた新しい事業起こしに関心を持っていました。そこで感じたのはまだまだ富士市には魅力がある、フットワーク良くトップセールスで営業部長のつもりで取り組んでいく必要があるということでした。それから富士市は都市活力再生ビジョンを策定していて4つの戦略と11のプロジェクト、その下に具体的な50の取り組みを展開していますが、評価をきちんとしながら成果を上げていきたいと思っています。 予算のことも少し触れておきます。平成26年度は一般会計で829億円、特別会計などを加えた総額では1647億円。共に過去最大です。

投資的経費は前年の130億円から143億円と伸びましたが、これは新たな施設に投資するというより既存施設の老朽化による建て替え、更新に対応するためです。この財源をどう賄っていくか、税収の伸びは期待できませんから国の補助金や交付金、市の借金である市債を発行して何とかやりくりしていくしかありません。厳しい財政運営を迫られていることにもご理解をお願いするところがあります。それでは公共側が投資していく部分が限られてくる中で地域の活性化を図るためにはどうするかといいますと、民間活力の導入です。富士市の魅力をいかに発信して民間の活力、民間資本を富士地域に投下させるかということに掛かっています。今力を入れているのは新東名インター周辺の物流拠点、区画整理事業と地域活性化を生む田子浦港の活用です。田子浦は津波による浸水区域をゼロにする防災とにぎわい創出の2つをテーマに取り組みます。港は県の管理ですが、市が先頭に立って官民共同で推進します。今後の大きな目玉となるでしょう。

◆大石 続いてレイラインの小松さんにお伺いします。富士山の世界遺産登録で観光がブームになっているように思います。富士市の現状はどうでしょうか。

進出サポートでミャンマーにも会社 花盛りの着地型観光も淘汰の時代に

◆小松 富士市で開業して間もなく20年の会社です。旅行業界の動向から言いますと、会社を始めた20年前は旅行業の登録業者が全国で約1万8千社ありました。現在は1万社と半分近くまで



小松みゆき氏

減りました。外から見ると旅行会社は全部同じように見えますが、実は取り扱える旅行の範囲などが違って、旅行業の登録には5種あって私どもは大手さんと同じ一種を取得しています。この一種は開業当時2千社ぐらいあったものが今では700社、それぐらい旅行会社は減少しています。最大の原因はインターネットの台頭です。宿泊予約から航空券、JRの乗車券といったものが移行してしまいました。またかつてはパッケージツアー

と同じ料金で個人客のオリジナル旅行を手掛け、利益も確保できたのですが、こうしたビジネスモデルも変えざるをえなくなりました。

現在柱としているのはミャンマーに会社を設立して東南アジア進出を目指す企業のサポート事業です。もう一つは最近ようやく言葉として市民権を得た着地型観光です。従来の旅行会社は「どこそこに行きますよ」といって皆さんに声を掛け、ここから案内が始まるという業務でしたが、着地型は「静岡に来てください、富士に来てください。この先ご案内できるのは私たちが一番詳しいですから」という形で進めていきます。分かりやすく言うと、海外旅行のオプションツアーのようなものです。残念ながら富士市ではまだそういう事例を扱っていないのですが、静岡市とか県の委託事業でやらせていただいています。着地型観光は北海道から九州、沖縄まで全国一斉という状況で花盛りです。そば打ち体験をはじめいろんなところが体験プログラムを山ほど作っています。現状は淘汰されたところとますます元気になったところがあり、勝ち組、負け組が出始めた感があります。

◆大石 ミャンマーに会社を設立したのは現地に人を送り込むためですか、それとも小松さん自身が向こうに軸足を移すということですか。

◆小松 当初はビジネスマッチングという形で視察やツアーを組んでいました。でも現地の企業や行政関係をご案内させていただいているうちに、どんどんお客さんの会社が進出していくようになり、業容を拡大することにしました。というのは現地に会社ができしまうと、航空券はネットで買うみたいになって顧客ではなくなってしまいます。今現地に1人出しています。そして進出を目指す企業さんの苦労も目の当たりにしてきましたから、案内だけでなく現地事情に詳しいという強みを生かして企業進出をサポートするようになりました。ワンストップサービスですべてらせていただいています。

◆大石 大島さん、先ほどは基調講演ありがとうございました。人口減少が進めば進むほど首都圏など大都市圏に人や物が集中するのはやはり不可避な流れでしょうか。2011年3月11日の東日本大震災以降の人や物の流れの変化に関するデータはまだ出揃っていないようですが、3.11以降の変化で講演に付け加えることがありますか。

3.11 後も物流はコスト、リードタイム重視 安全安心な物流拠点の展開に有利な富士地域

◆大島 東京など大都市圏へのさらなる集中は先ほどもお話したように避けられないだろうと思います。ただ人の場合はそこに選択が働きます。生活しやすいのかしづらいのか、生活しやすいのであればその地であるということです。

3・11では自動車産業など大手メーカーの稼働が1週間、1カ月と止まりました。そうならない仕組みに作り替えるのが議論になりました。物についていえば、震災直後には在庫を置かない生産や物流の仕組みを見直す動きが見受けられました。その後はどうか。正確な数字がありませんので傾向としてみると、在庫や流通、物流の仕組みを、余裕を持った方式にしようという方向にはどうも動いていない気がします。結果論的に物流に関してはコスト重視、リードタイム重視の方向は相変わらず続いています。

◆大石 すごく気になっているのは首都圏周辺の道路整備が進んできていることです。影響はありますか。

◆大島 ご存知かもしれませんが、圏央道がこれからつながっていったって常磐道、東北道、中央道、東名が環状道路で結ばれる時代になってきます。これによって物の流れが一層スムーズになり、途中



大島弘明氏

中で事故なりのリスクが発生した場合にはダブル、トリプルの複線化で最小限に回避され、定時性などが上がるでしょう。これを見越して圏央道を中心に物流拠点が脚光を浴びています。道路ネットワークのいいところに物流拠点を置きたい、それは将来の首都圏集中を考えればなおさらです。では当該地、静岡県が取り残されるのかというと、ナショナルブランドのメーカーなどは道路環境が良くなっているがゆえに物流拠点を集約することを考えています。道路ネットワークが良くなって今までと同じようなリードタイムで届けられる範囲が広がるからです。こちらはちょっと東に寄りすぎているのかなという気はしますが、新東名ができて旧東名、国道1号とダブル、トリプルの道

路ネットワークになりましたから、集約化の一つのポジションになるかと思います。

記憶に新しいところでは大雪による通行止めがあります。実際に新東名は2回目の雪では通れなかったけれど、現東名の方は使えました。私の知っている社長さんは自らドライバーをしていて大阪から帰る時に、どちらを選ぼうかを考えて中央道を選択し、3日間雪の中に閉じ込められてしまいました。結果的には太平洋側に出ていれば良かったということになりますが、このように物流にはいかに安全安心が取れるかという課題が付いて回ります。安全安心な物流拠点の展開に対する中部地域のポテンシャルは高いです。全国拠点の中でどこを選ぶかというときに、こちらはトリプルアクセスができる場所という優位性が大いに発揮できる場所ではないかと思います。

◆大石 海岸部立地企業が内陸部に移転する動きがみられます。物流業界は沿岸部をどう生かし、使おうとしていますか。港の活用も含めてお願いします。

◆大島 周りを海に囲まれている島国であるということや災害時対応、あるいは環境対策でトラックから海に移しましょうとか鉄道を使いましょうという議論はありますが、貨物船で見た場合、行き帰りの荷物がかなり確保できないと船会社そのものが成り立ちません。安全性とか経済性、環境の面において注目されることはあっても大きく見積もるのは怖いという感じがします。

それから総論としていえるのは物流拠点の展開や施設の提供について物流業者の側が主導権を取りにくいことです。鉄道を使うのか船を使うのか運送業者の方から提案はできても、最終判断はお客さん、荷主さんの元にあります。荷主さん側が物流をどう考えるのか、物流の仕組みをどう作っていくのかというところにかかっています。例えば新しい高速道路ができて物流拠点を作るとして、行政側がこういうところを提供したいと思っていますと運送業大手に話を聞きにいくと、「荷主さん次第なので自分たちでは何とも言えない」という回答が多々あります。どちらかという受け身の部分が多いので自発的に運送事業者が動ける範囲はどうしても限られる傾向にあります。

◆大石 小松さんにお聞きします。富士地域にはいろんな魅力があり、いろんな資源もあると思いますが、十分に生かせていないような気がしています。もっと生かせるチャンスがあるのではないのでしょうか。

外国人の人気スポットは富士大橋 当り前の光景が観光資源になる

◆小松 新東名ができてどのように変わってきたかということについて少しお話をします。新東名開通の日にうちはツアーを組みました。ただ新東名を走るだけという走り初めです。いろんな旅行社さんに出しましたが相当集まりました。沼津のサービスエリアが人気でしたね。沼津駅前からサービスエリアに行くだけのバスが毎日何本も出ていました。

富士では具体的な案件はないのですが、静岡市の奥の方、井川とか梅ヶ島、有東木、足久保、清水の両河内、小河内といった集落を含む4地域を対象に毎月1回勉強会を開き、お客様を受け入れる着地型の観光プログラム作りをしました。「おくしずビジネスツーリングカレッジ」と名付けた事業です。モニターツアーをやっているところとそうでないところとばらつきはありましたが、一堂に会して勉強してきたことで横のつながりも生まれ、いい形での進み方ができた事例です。

このおくしずは新東名の開通でインターからの時間的距離が30分から1時間近く短縮された地域です。富士市の場合は高速道路のインターチェンジが市街地に近いですからこのような効果を期待するのは難しいかもしれません。こちらのモニターツアーでは東京からご案内したお客さんを御殿場から新東名に乗せ、富士では降りずに清水まで行きました。富士川橋を越え、振り返って見ていただくと富士山がとてもきれいに見えるからです。時間的にはロスですが、景色も一つの財産として入れさせていただきました。

今、富士市を訪れる外国人の方がすごく増えています。新幹線の新富士駅で降りて歩き出すそうです。どこに行くのか。富士の大橋の上まで行って富士山の写真を撮り、富士駅に向かいます。尋ねてみると、外国人が発信しているブログに富士山がきれいに撮れるルートとして紹介されているからだそうです。

私がいつももったいないと思うのは新富士駅に着いた外国人のお客さんが迎えに来た地元ではないバスに乗り込み、富士を通り抜けて富士宮から山梨県の方に行ってしまうことです。完全に通過点になってしまっています。外国人に富士市に立ち寄ってもらう見せ方とか工夫が必要であり、まだまだ知られていないものはあると思います。富士の大橋の例のように地元の人にとって当り前の光景や物が大切な観光資源、要素になります。

中にいると当り前だけになかなか探し出せない。でも探して発信していかないとスポットを浴びることはないでしょう。

先日、こんなオファーがありました。酒蔵見学のツアーでしたが、「行った先の地酒が飲みたいので、飲ませてくれて静岡の名物が食べられる店で宴会をしたい」というものでした。ちょっと常識からは外れていますが、付き合いのある居酒屋さんをお願いしてセッティングさせていただきました。有名な酒蔵や居酒屋は知っていても、途中途中につなぐ観光地とどう組み合わせようか。そのコーディネートは地元、地域の人にやってもらわなければできません。「面白かった」と言っていたが、担当したスタッフも喜んでいました。

観光立国、ビジットジャパンに政府が力を入れていることもあって海外メディアの視察が増え、お手伝いすることがあります。こちらが素材で提供するもの、行政側がここを見せたいというものがある。案内するのですが、台湾や韓国などのメディアが探し出してくるものはちょっと違います。なんでこんなことに興味を示したり、喜んだり、面白がったりするのだろうか。反応の違いというか、そのギャップには驚かされます。そのあたりにもヒントが隠されているかもしれません。

◆大石 やっぱり何気ないことが意外と驚きだったりしますね。そういう意味で小長井市長にお聞きしたいのですが、富士市には私の知る限りでも岩本山や田子浦港からの富士山があり、ほかにもたくさんビューポイントがあるでしょう。富士市は新東名及びその交通インフラを生かしてもっといろんなことができると思います。新東名の絡みでは物流センターと観光拠点的なものがあるわけですが、こんな可能性があるということでお話をいただければ。



大石人士氏

今夏にもワンコインタクシーや海上祭 企業回りで感じる手応え、再生の兆し

◆小長井 残念ながら富士市には世界文化遺産登録における構成資産がありません。とはいっても

新年度予算にはゼロから富士山頂を目指すルート
の確保を盛り込んでいますし、富士宮市さんとは
連携を強化しつつそれぞれの強みを発揮する独
自の施策を模索していきます。

富士山のビューポイントの話が出ましたが、富
士山百景という写真コンテストを開催しています。
ビューポイント指定地は富士市内で100カ所あり、
このうち茶畑と富士山がマッチする場所の周辺整
備を行い、観光客や市民に富士山の素晴らしい景
観を楽しんでもらおうという取り組みもしていま
す。また富士市役所の屋上を開放して富士山が良
く見えるテラスにしました。新富士駅に降り立っ
た外国人に近くで富士山が楽しめる場所を案内す
る仕組みも考えていきます。これは富士駅と新富
士駅をどうつなぐかという長年の課題にも関連し
ますが、ことし7月から9月の夏山シーズンには
両駅を結ぶワンコインタクシーの試験運行を実施
します。ワンコインは500円。合せてアンケート
調査も行い、利用者のデータを集めて観光振興に
役立てていきたいと思っています。それから新富
士駅と田子浦港は近距離にあります。港の活用は
観光につながりますから、海上祭のようなものを
開催してことしは海上から富士山を眺めていただ
き、その良さを再認識してもらおうかと考えてい
ます。客船とか帆船が誘致できればさらに盛り上
がるのではないのでしょうか。

◆大石 観光に関してもう一つお聞きしたいのは
スポーツビジネスというかスポーツの誘致です。
昨年は大学女子駅伝を開催しました。前々から熱
心でアルティメットの大会も開いていますね。

◆小長井 スポーツ観光という考え方でとらえて
いまして、フライング競技の中のアルティメット
は年間5、6回の全国規模の大会があります。3
月の第3週には全国から2千数百人の選手が集ま
り、ドリームカップという一番大きな大会が開か
れます。かなりの経済効果があるのではないでしょ
うか。富士川の緑地公園はここ1カ所で多くの
コートが取れますから移動する必要がないという
利点があり、ソフトボール、野球、サッカーなど
全国レベルの大会が数多く開かれています。大学
生の富士山女子駅伝は今年も開催の予定で、予算
にも組み入れています。

◆大石 明るい話がたくさん出てきました。富士
市は元々、ものづくりの都市です。東名があって
新東名ができ、新幹線の駅はあるしJRの駅もある
ということで本来、人、物が集まりやすい場所
ですが、大手企業の縮小や転出がみられ、新規の
企業誘致や転出防止の施策が必要になっています。
地域の雇用や税収の確保を図るためにも。

◆小長井 企業回りを始めています。早い段階で



小長井義正氏

100社ぐら
いは回って歩
こうと思っ
ています。こ
れまでにお
伺いした範
围では手ご
たえ、これ
から良くな
っていくと
いう手ごた
えを感じて
います。

製紙関係の皆さんからは富士市の工場でなければ
できない紙がある、特色・強みのある製品を作っ
ているという力強い声が伝わってきました。いい
意味での集約・連携、価格競争力の強化などさま
ざまな動き、方法を取りながら前進していくの
ではないかと感じています。上向くチャンスは十分
にあると思います。

企業誘致の面でも富士市のポテンシャルを評価
し、新しい事業への可能性も探りながら進出して
きているという印象を持ちます。ここで気付く
のは我々が富士市の魅力、底力といったものをう
まく発信してこなかったということです。今まで富
士市が蓄積してきた技術や人材を掘り起こし磨き
上げて、いかに発信していくか。こうしたことが
企業誘致とか市内の企業の異業種連携につながり、
広がりを持っていくのではないかと思います。こ
れまでの行政には欠けていたところなので積極的
に取り組んでいきたい。

◆大石 富士地域には可能性がある、やりようが
あると言われながらもなかなか実現できないでい
ます。何とかしなくてはいけないという部分がた
くさんあるでしょう。小松さん、着地型観光にし
ても外国人観光客誘致のインバウンドにしても、
こういうことをやったらどうかということはある
ませんか。

◆小松 あまり手の内は明かしたくないですが(笑
い)。そうですね、富士市と観光はイメージ的
にかけ離れているところがあります。地元では何
で観光なのと思われてしまうし、富士山のイメ
ージを強調しても中国辺りに行くと、富士山は富
士市でもなく静岡県でもなく、山梨県にあると思
っている方が随分といます。そんな中で富士市の
戦略をどう描いていくか。外国から人を呼ぶこ
とも大事ですが、近い所の東京や首都圏、もっ
と狭めれば同じ静岡県内からでも富士市には
こんな面白い所があるよということで人を呼ぶ、
そんな素材をもっと発信していく仕方も考えな
くはない

と思います。

◆大石 大島さんには物流を中心にお話をさせていただいていますが、当地に物流業者にもっと来てもらうなり、これだけの交通インフラが整っているのだからこんなことができるという観点からはいかがですか。地元にとっても参考になると思いますので。

物流新時代へ地元のパートナーシップを 具体的な引き合いがある新富士IC周辺

◆大島 新たな施設整備、新規立地が難しい時代に入り、物流拠点、物流施設の範疇でも容易なことではないと感じています。物流は最終的には荷主さん側の判断によって決まるという側面を紹介しましたが、物流の仕組みや現場での問題など悩みや課題をパートナーシップを発揮して一緒に考え、解決を目指すという地域があれば心強いですね。言っていないかどうか分かりませんが、物流は迷惑なもの、迷惑な施設と受け止められやすい業種です。夜中の東名や新東名は8、9割がトラックで、「大きいし怖い」といわれます。トラックは自ら走ってはいませんし、お客さんのオーダーに応じて走っているわけでして決して迷惑なものではないと思います。拠点誘致の際にはトラックの出入りが頻繁で騒音や交通安全上の心配があるとか、観光に支障をきたすといわれてしまいます。簡単ではないですが、物流に理解を示し意識の向上を図っていただくとうれしい。

アイディア的なものでは高速道路の料金体系を途中下車可能にさせていただくことです。現状では東京—大阪間を走る際に途中富士市で降りると、通しの料金より割高になります。例えば100km以上の長距離とか、一定時間内という枠組みで途中下車を認めてもらう。今のETCの技術を使えば可能でしょう。料金体系見直しの提案や発信を地元にも期待したい。なぜなら通過地域にならないためであり、物流拠点の誘致にも役立つでしょう。

◆大石 小長井市政がスタートしました。大島さんや小松さんの指摘も踏まえてこれから何が必要で、どんなことに力を入れていくのでしょうか。

◆小長井 きょうは観光と物流が大きなテーマです。その2点に絞ってお話します。観光の分野では富士山シティプロモーション推進室という組織を設置します。富士山観光をはじめ富士山にかかわることはすべて対応するとともに富士山を含む富士市全体の魅力を全国、世界に発信していくセッションです。この地域には富士山観光交流ビューローという組織もありますからそこもしっ

かりと連携を取り、シティプロモーション推進室が先頭に立つぐらいの自覚と気概で取り組みたいと思っています。

物流では新富士インター周辺の区画整理事業の中で物流拠点を整備しています。すべて完成するのは平成32年度ですが、27年度から一部供用開始する予定です。内容はまだ公表できませんが、かなり具体的な引き合いが来ています。複数ある物流拠点を集約するという考え方のところがあって、先ほど大島さんがおっしゃった乗換方式の中間拠点のような新しい物流の仕組みを考えているのかなという感想を持ちました。複合施設が進出できる区画も用意していますから物流のみならず集客施設が進出して来る可能性もあります。地域の活性化に向けての明るい話題として大いに期待しているところです。

◆大石 きょうはなるべく夢を語っていただくとう議論を進めてまいりましたが、夢を実現しようとすれば克服しなければならないさまざまな課題が浮上してきます。インフラ整備を生かしていくためには官民一体の取り組み、市民・住民との話し合いなどを通してより良いものを作り上げていく姿勢が大切で、そのためには夢をしっかりと描いておくことが重要ではないかと思いました

〈略 歴〉

◇パネリスト

■小松みゆき 氏(こまつ・みゆき) (株)レイライン代表取締役社長

日本通運の旅行部門(現日通旅行)など大手中小旅行3社の勤務経験を基に1994年個人や団体のオリジナル旅行の提案を目指し独立開業。2001年現社名に変更。同時期に業界経営者が集う「旅行産業経営塾」で学んだ着地型観光を手掛ける。05年NPO法人旅行・観光産業機構を設立し副理事長。現在静岡県の委託事業として着地型旅行の推進に取り組む。静岡市の中山間地域振興支援事業の審査員。1959年富士市出身。

■小長井義正 氏(こなが い・よしまさ) 富士市長

総合商社ニチメン(現双日)を経て、1988年家業の小長井米店従事。97年12月から5期(15年半)、富士市議会議員。ことし1月19日、富士市長に就任した。富士市議時代に議長、富士市監査委員、県市議会議長会会長、全国特例市議会議長会副会長を歴任した。現在、ポークアウト富士地区協議会会長、富士市フライングディスク協会会長を務める。元富士市青年会議所(JC)副理事長。1955年富士市出身。

◇コーディネーター

■大石 人士 氏(おおishi・ひとし) サンフロント21懇話会TESS研究員

静岡銀行入行後、1982年静岡経済研究所出向。2005年研究部長、12年理事。県社会資本整備重点計画策定・推進会議委員、県試験研究機関外部評価委員、焼津市行財政改革推進審議会委員、藤枝市産業振興懇話会委員、三島市行政経営戦略会議委員など公職多数。静岡英和学院大学短期大学部非常勤講師、学生と企業との就職・採用ミスマッチ解消に向け「しずおか産学就職連絡会」の事務局も務める。1956年藤枝市出身。

伊豆地区分科会

2013年11月18日／ホテルサンバレー富士見

スポーツは伊豆の観光振興や地域の活力の源 変化受け止めた新観光市場づくりテーマに基調講演とパネル討論

「サンフロント21懇話会」(代表幹事・岡野光喜スルガ銀行社長)は11月18日、第19回伊豆地区分科会を伊豆の国市のホテルサンバレー富士見で開いた。約150人が参加し、スポーツを軸に伊豆の観光振興と地域活性化を図るスポーツツーリズムの可能性を探った。

主催者を代表してあいさつした北村敏廣静岡新聞社代表取締役専務は「スポーツを観光の切り口で見直すことに挑戦したい」と提案し、開催地代表の小野登志子伊豆の国市長は「スポーツはこれからの伊豆の観光発展に欠かせない」と期待を寄せた。

基調講演の講師はITを活用した経営コンサルタント会社役員でJリーグ理事を務める傍士銑太氏。「スポーツが伊豆を元気にする—その発想と実践」と題してサッカーのJ1、J2は年間100万人の交

流人口を生み、試合の前後は観光に充てている現状を紹介し、観光関係者は人が動くことにもっと着目してほしいと指摘した。さらに地域は自分のまちに誇りを持つことが大事で、いつでも、どこでも、だれでも、どのレベルからでもスポーツが楽しめる環境づくりが伊豆を元気にするために必要だと述べた。

「スポーツが創る新たな観光市場」がテーマのパネル討論は伊豆市長の菊地豊氏、スポーツマネジメント社長の脇田英人氏、サッカーJ3参入を目指すアスクラロスルガ社長の山本浩義氏が登壇した。シード副社長(サンフロント21懇話会TES S研究員)の青山茂氏の進行で、スポーツを通じた地域づくりへの思いや取り組み、伊豆の観光資源の見直しなどを語った。

主催者代表あいさつ



静岡新聞社代表取締役専務

北村敏廣

本日は伊豆の観光振興や地域の活力の源としてスポーツに注目してみたいと思います。スポーツが地域の誇りや一体感を育む手段だということはことしプロ野球の楽天が初の日本一になったことで証明されました。私たちはスポーツを観光の切り口で見直すことに挑戦したいと思います。

基調講演をお願いしました傍士銑太様は元銀行マン、自動車や原付バイクのご当地ナンバーの提唱・推進者であり、Jリーグ理事などを務めサッカーにも精通されています。どのような視点からどんなアドバイスをいただけるか楽しみです。パネル討論のテーマは「スポーツが創る新たな観光市場」です。パネリストの一人にサッカーJ3への参入を目指すアスクラロスルガの社長、山本浩義様をお招きしています。サッカーもスポーツツーリズムの一翼を担う有力な存在になるかもしれません。

サンフロント21懇話会は今後も県東部の発展に向け、さまざまな活動を続けてまいります。皆様方のさらなるご支援、ご協力をお願いいたします。

市長就任から半年余りですが、サンフロント21懇話会の会合には平成15年に県議となって以降できるだけ出席し学ばせていただいています。県東部の諸問題に正面から取り組み、地域の活性化、さらなる発展に向け、さまざまな提言をされ実行に移していることに対して心より信頼を寄せ、敬意を表します。

政府はスポーツ行政を一元化するためスポーツ庁を文科省の外局として創設する方針を打ち出しました。伊豆の国市はスポーツワールド跡地を総合スポーツ公園と位置付け、いろいろなところからご提案をいただいています。温泉、医療とききましたら次はスポーツです。そして文化、食、多彩な農業とこれらのブランドを産業として発展させていくことが私の仕事だと思っています。

観光伊豆、郷土の発展を考えた時、サービス業、「おもてなし」に確固とした地位を与える必要があります。女性の活躍は成長戦略の中核とされていますが、私はあえて「おもてなし」は男性の仕事にと考えています。サービス業の底上げが伊豆半島全体のテーマであるからです。



伊豆の国市長

小野 登志子

基調講演

「スポーツが伊豆を元気にする —その発想と実践—

コンシスト取締役常務執行役員

講師 傍士 銚 太氏



1990年代を境に
スポーツのとらえ方が変わった

傍士（ほうじ）というのは土佐にしかない名字で本名です。伊豆には縁がありまして勤めていた日本開発銀行の先輩で尊敬する大川澄人氏が菫山高校の出身、妻は修善寺温泉の旅館の娘です。自動車の伊豆ナンバー創設にも関わりました。15年ぐらい前に3年ほどドイツの支店にいた時、ナンバープレートにやたらと地名が多いことに気づいたことがきっかけでした。地名と知名度をサ

ッカーのJリーグでみると、ジュビロ磐田の例があります。磐田の人は知名度が低い、漢字が読んでももらえないこともあり浜松と言っていた。鳥栖もそうですが、Jリーグができただけでジュビロの磐田ですと言い換えることができるようになりました。私は慶応大学スポーツマネジメント学科の非常勤講師で、地域スポーツ育成論の講義をもう9年ぐらいしています。地域がスポーツをつくりスポーツが地域をつくるがテーマです。

スポーツをどうとらえるか。体育から始まり、学校や体育会、企業を宣伝しようという動きが加わりました。プロ野球や大相撲、プロレスといっ

たプロスポーツは限られていて国民的娯楽でしたが、地域性はほとんどなかった。これが20年前の日本のスポーツでした。

1990年世界的に変わりました。政治では冷戦の終結があり、スポーツの世界でも米国とソ連（ロシア）の対決がなくなり、ドーピングやステロイドアミみたいなものもなくなりました。93年のEU発足に伴い、EUの国の選手は外国人とはみなさないことになり、日本の選手がどんどん欧州に行けるようになりました。もう一つはメディアの改革。衛星放送がスタートし、プロフェッショナルな試合をナマで世界中で見られるという環境が出来上がりました。放映権という言葉が示すスポーツビジネスが急成長し、拡大したのもこのころです。

90年代には国際性ととともに地域性が登場します。それがJリーグであり、プロ野球のチーム名への地名付け、バスケットのbjリーグ、野球の独立リーグなどです。地域性を持ち、地域の文化になるという要素がスポーツに加わりました。

社会的な地位の向上もあります。健康とスポーツです。高齢化や医療費負担の増加を背景に健康寿命延伸都市などのスローガンが続出します。核になるのは地域のスポーツクラブではないかということで、Jリーグもそういうものを目指しています。最後に出てきたのが経済性。スポーツに投資する、スポーツを活用するという動きです。一言でスポーツといってもこの20年で中身、価値が全く変わってしまったと言えます。

今日のタイトルにもなっている元気は、人間が生きるための源だと思えます。スポーツで人間が元気になる、人間が変わる。スポーツが持つ意味合いには地域性もあれば健康、国際ということもあります。冒頭のごあいさつの中にスポーツ庁の話がありましたが、多様な広がりを見せるスポーツを全部一緒にしての政策実行となると教育委員会ではもう無理です。首長が決定権を持つセッションでなければスポーツが持つ原石を輝かせてダイヤモンドにすることは難しい。Jリーグのクラブを例にとれば、最初は「なんで1民間企業を優遇するのか」が自治体の議論でした。ところが今は市民として認められたばかりか、自治体の庁舎に垂れ幕がかかりポスターが張り出されたりしている。ホームページにバナーもある。自治体が俺たちのチームだ、うちのチームだと、チームのあるまちを誇りにするようになった。世の中、そして行政も様変わりしたわけです。

人口減少の時代に入っています。人口減少をこまねくよりは使うことです。どうやって使うか。お金よりもアイデア、工夫が必要です。外国のやり方を真似るんじゃなくて考え方を真似る、思想

を学ぶ。これらの物事はお金からではなく人から始まります。米国や欧州は富が日本のような一極集中ではなく適度に分散しています。富が分散しているからそこにスポーツが宿り、プロスポーツが発展していく。欧米では分散型、地方分権型が成立しています。

地域が自ら考え決められる分権型の時代

日本はこれまでホストコンピューター型でした。中央装置にすべて計算して決めてもらい、答えが返って来る。地方はモニターでした。ところが今のインターネットの世界にはクライアントサーバーというのがあります。地域、地域が何かを考えて決めることができ、中央を介さずにそれぞれの地域がつながることができるようになってきました。ホーム&アウエーのリーグ戦を思い描くと、双方におもてなしの施設、気持ちが必要になってきますから、1カ所だけ立派であればいいということにはならない。そのようにこの国の形が徐々に変わりつつあります。

実は江戸中期まで日本は分権型でした。明治期初の国勢調査と平成の大合併前の都市人口ランキングを比較してみると、当時関東の1位は東京、次いで横浜、3位が銚子で全国の35位でした。ランキングを大きく下げた都市は全国に散らばっていますが、かつては北前船で栄えた日本海側に特に多いことに気づきます。この分布図に現在のプロスポーツの本拠地を重ね合わせてみましょう。Jリーグにフットサル、プロ野球、独立リーグ、バスケのbjリーグを合わせ45都道府県に115チームあります。20年前まではプロ野球の12しかありませんでした。この間に100増えました。全国にいろんなスポーツの本拠地ができたからです。プロ野球にしても西鉄ライオンズが去ってそのままだったら今の福岡のにぎわいはないし、日本ハムが移った北海道、日本一になった楽天の仙台にしてもそうです。新潟も含めましょう。人口停滞期に入った80年代以降、増減とは関係なくチームが増え、繁栄しました。

発展の理由を川淵三郎さんのJリーグ開会宣言にみることができます。「スポーツを愛する多くの皆様に支えられまして大きな夢の実現に向かって」。サッカーという言葉を使わずにスポーツ全体の発展のためといい、大きな夢とは地域の発展のために第一歩を踏み出すことを掲げています。理念として豊かなスポーツ文化の振興と健康を目標にJリーグのクラブを全国にたくさん作ることを打ち出しました。

よく野球かサッカーかと議論がありましたが、一つの種目を争ってはいられなくなっています。

少子化で中学校の部員はこの10年間で5万人も減りました。1人1種目しかスポーツができない環境では子供たちの気持ちも離れていきます。部活の顧問の先生にしても競技経験とは無縁のクラブを指導していたり、部活の維持や強化のため少なくなった子供の奪い合いをしています。子供たちが不幸にならないためにもスポーツクラブが必要です。部活ではもう無理です。最低2種目はできるような環境づくりが求められていると思います。

頼っているのはダメ、 地域に根差した経済的自立を

スポーツは頼っているのはダメです。自立、経済的な自立が重要です。そのためには地域に根差すこと。企業名ではなく、地名・地元の名前で動き、市民となるのが大前提となります。次は全体で発展することです。さらに世界とつながることです。日本代表の活躍には皆さんわくわくするでしょう。それとサッカーでは沼津のクラブチームが世界クラブ選手権に出場する道が開けています。スポーツは世界友好の懸け橋となります。都市名だってそうです。長谷部がヴォルフスブルク（現在はFCニュルンベルク）に行けば今まで知らなかったドイツの地名を覚え、内田がドイツ語で今あるのは函南のおかげですと言えばつながっていきます。それは函南の人の誇りにもなります。

スポーツで地域を元気にするといってもチームが経済的に自立していないと困難です。単にスポンサーになってくださいといくのではなく、パートナーなど何らかの関係をつくるのが重要です。パートナーには企業、NPO、自治体などいろんな主体がありますが、それぞれとの関係性の組み合わせで効果を発揮することができます。経営への参画、観客として入場料を払う、ボランティアをする、スタッフとして働くといったことのほか、自分の商売でできることをするなどがあります。そして経営内容は地域に明きらかにします。地域に根差すと言った以上、透明性が不可欠だからです。

1999年にあらゆる連敗記録を塗り替えてつぶれる寸前になったヴァンフォーレ甲府にいい例があります。パン屋さんに賞味期限のパンを差し入れてもらって空腹を満たし、お風呂屋さんでは練習後タダで入れてもらう、散髪は月に一度だけ無料でといった具合でサポートしてもらいました。そうすると情が移るから入場券を買って応援してくれるなど新たな広がり生まれます。ですから地域から浮いてしまったら何の意味もない。自分の地域に必要なものは何か、スポーツとどう絡めばいいか、そのために自分たちにできることは何

かを常に考える。それがなければどんなに立派な箱物を造ってもらっても廃墟になるだけです。

注目は交流人口、「東京」介さずに人が動く

スポーツツーリズムには3つのパターンがあります。まずキャンプ、これは誘致です。投資競争です。よほどの優位性がないと、お金がなくなったら負けます。もう一つはツアー。ゴルフがそうです。マラソン大会、自転車の大会、将棋や囲碁のタイトル戦も含めていいでしょう。ツアー競技は定着するまでにお金がかかりますが、一旦定着して人気が出ると毎年来てもらえるようになります。でも地元の人がほとんど走っていないような、あるいは運動不足に陥っているようなまちが市民マラソンやっていますというのはちょっと無理が…。

三つ目はJリーグでいうホーム&アウェー。ホームでの試合はだいたい2週間に1回です。それが待てない人はアウェーに行きます。その人たちを試算すると、J1、J2の780試合で約100万人が動いている。これが交流人口です。彼らはたった2時間のために遠方まで行きます。この2時間のゲーム以外は観光客です。観光のためではなく別の目的で行った人が観光客になるのです。新潟での浦和戦の際、埼玉県の夫婦に小遣い帳を付けてもらいました。交通費を除いて1泊2日で1人2万円でした。この消費額を増やすも減らすも仕掛け次第。しかもJリーグの試合は年間スケジュールが2月初めには決まるので観光関係者もこの時点から動き出します。観光業の方にとってスポーツは関係ないではなく、人が動くことに目を付けないともったいないことになるわけです。J2でもそこそこの人数が動きます。このアウェーツーリズムの特徴は交通の発達もあって東京を介さなくても人が動くことです。

スタジアムをまちづくりに生かす

皆さんはスタジアムを競技場の概念でとらえていませんか。欧米では20年ほど前からスタジアムとまちづくりが連動しています。進化論的に振り返ってみると、グラウンドから大会を開くための総合陸上競技場を車でなければ行けないような遠方に造るようになった。あるのは総合的な競技場を造るという視点のみで、観客やメディアのことは考えていない。ところがホームチームができると、市街地に近づいてきます。そして屋根を付けたり、飲食を取り入れたりするようになります。

もう一つ大事なことは専用です。サッカー専用

のグラウンドと陸上トラックが付いているグラウンドでのゲームを見比べてください。きっとトラック付きでは二度と見たくないと思うでしょう。日本では多目的活用を進めてきましたが、文化の領域には到達できなかった。専門というのが文化であり、スポーツで文化を語るなら専門性が必要です。

欧米でスタジアムはどんな変化をしてきたか。米国の野球場、欧州のサッカー場は街中に回帰しました。ホームゲームは年間30日弱、残りは地域社会のための施設にしようということでもちづくりとスタジアムが結びついています。浦和レッズ5万人、新潟アルジージャ4万人と大集客装置のスタジアムには多くの人々が詰めかけますが、田んぼの中に集まって帰って行きます。何ともったいないことか。もしあのスカイツリーが霞ヶ浦の方にあったらどうですか。単に鉄塔、電波塔が建っていますみたいなもので、店もまちもにぎわいもないでしょう。いま大事なものは複合です。合わされば離れないが連携は解消できる。助け合う、愛し合う。そういう関係を作っていく基にあるのがスポーツだと思います。

これから大事だと思うのは発想です。その一つに表現力があります。よく発信力が足りないとか、発信力をつけないといけないとかいいますが、要は自分たちの内側にある誇りだとかプライドだとかをまちに表現できているかということです。誇りがまちに表現されていれば発信する必要がないと思います。またこれまでは大きいことはいいことだという風潮でしたが、本来は小さい、コンパクトな方がいいのです。

日本でも最近いろいろな動きが出てきました。新潟県長岡市は昨年4月に市役所が郊外からシャッター商店街が目立つ街中に移転してきました。バスケのbjリーグの試合を行うアリーナを併設しています。新幹線の駅から1分の距離です。ギラバックス北九州は3年後に小倉駅から500mの海沿いに街づくりの視点で考えたスタジアムが完成します。他にもガンバ大阪のスタジアムとアウトレットモールなどさまざまな複合化の動きがみられます。

最後にJリーグは「あなたのまちにもJリーグ」というキャッチフレーズを掲げています。スポーツのあるわが町を愛する市民をつくりたいと地元愛をうたっています。つまりスポーツで自分のまちを考える、自分のまちを愛するきっかけにする、いろんな人と交流することです。自分のまちに関心のあるレベルの高い市民が育てば、行政はもっと質の高い仕事ができるようになります。関心は先ほど申し上げた誇りと同じ意味にとらえてください。

まちを誇りに、大事にしたい拍手と握手

自分の町を誇りに思うことがいかに大事か、そのいい例に食文化があります。ミシュランの星のレストランはなぜか日本では都会ばかりですが、本来は田舎にあるものです。ドイツでは180のうち人口5万人以下に100、イタリアでは200のうち99が1万人以下のまちにあります。生産地の優位性＝消費地の優位性ということで、生産地で食べる、飲む、味わう、風景を感じることに意義があります。生産農家だけが儲かる仕組みでは地域は発展しません。地域全体が発展するようにしていくことです。なぜ必要か、人が来るからです。言い換えればチームがあるから人が来てくれるホームタウンの魅力を磨くことです。お酒のメニューでも地元の蔵元を前面に出す。真っ先に書き、きちんと説明するだけでも違います。色彩にしてもセレッソは駅の色をどピンクにしています。ちょっと驚きますがこれでいいのです。写真を撮るといふ行為が発生しますから。

Jリーグのスタジアムは地震対策に欠かせない大規模避難拠点の要件を満たしています。医療施設があり、トイレは充実していて厨房施設があり、情報発信の設備も整っている。グラウンドの下は備蓄倉庫になります。これらはすべてスポーツが持つ幅広さです。さまざまに活用できるものなのです。

最後に最も大事だと思っていることを申し上げます。簡単なようでいて実は難しい拍手と握手です。素直に拍手することを阻んでいるのは嫉妬心です。握手は何を意味するか、タテ割りの排除です。嫉妬心を持ち、タテ割りで物事を考えていたらスポーツでまちを元気にすることはできません。

< 講師略歴 >

■傍士 銚太 氏(ほうじ・せんた) 1980年日本開発銀行(現日本政策投資銀行)入行。ドイツ・フランクフルト首席駐在員、岡山事務所長、地域企画部審議役などを歴任後、(財)日本経済研究所専務理事を経て、2013年ITを活用した経営コンサル会社(株)コンシスト(東京)取締役常務執行役員。Jリーグ理事。日本サッカー協会国際委員などを務める。自動車、原付バイクのご当地ナンバーの提唱・推進者。1955年高知県出身。



「スポーツが創る 新たな観光市場」



〈パネリスト〉

脇田 英人 氏(スポーツマネジメント(株)代表取締役社長)
 菊地 豊 氏(伊豆市長)
 山本 浩義 氏(アスルクラロスルガ(株)代表取締役社長)
 傍士 銚太 氏((株)コンシスト取締役常務執行役員)

〈コーディネーター〉

青山 茂 氏(シード取締役副社長 サンフロント21懇話会TESS研究員)

◆青山 基調講演では傍士さんからはスポーツで伊豆を元気にするにはわがまちを愛する人をつくる、まちづくりと一体であるご指摘をいただきました。伊豆に関しては交流客数が昭和63年の7400万人に対し、平成22年ぐらになると3600万人とほぼ半減し衰退期に入ったとよく言われます。しかし訪れる方の年齢層をみると、20代、30代は県内平均よりはるかに多い。さらにリピーター率が高く、20回以上が4分の1、5回以上が6割を超えています。こうしたデータにも目を向け、そこから発想していくことが大事だと思います。

きょうはスポーツを軸にしてどういった新たな観光市場が見えて来るか、をテーマに議論・検証し、新たな道筋が提言できればということで始めたいと思います。まず伊豆の切り込み隊長、菊地市長に伊豆観光の現状、伊豆は何をしなければならぬかということについてお願いします。

単なる物見遊山の観光から 生活満足度を高める観光へ

◆菊地 二つ挙げたいと思います。まず2020年開催が決まった東京オリンピックが大きなチャンスです。オリンピックを見に来た外国人観光客に

日本を代表する景観・富士山をみてもらう場であり、また伊豆市にあるサイクルスポーツセンターは国内唯一の自転車競技の強化拠点、ナショナルトレーニングセンターですので各国選手の練習場所もここしかない。伊豆市が修善寺がというよりも伊豆半島の財産です。使わない手はないでしょう。

もう一つは首都圏3000万人に日々の生活満足度を向上させるための場を提供していくという姿に伊豆半島を変えていくこと。月給3万円のころ、首都圏の皆さんは家族で年1回伊豆に来られれば幸せな時代でした。伊東も熱海も修善寺も湯ヶ島も待っていればお客さんが来てくれました。高度成長とともに海外旅行が急拡大し、伊豆はここに来れば幸せだった時代からワン・ノブ・ゼムになったのです。これをどう変えていくか。これからは月に1回とか2週間に1回とかちょっと天気の良い時に伊豆に行ってくる、物見遊山ではなくちよっと週末を癒やしにくる場所になるのではないのでしょうか。

スポーツ施設で言えば伊豆市にはふるさと広場という複合施設があります。ここは5年後、平成30年には伊豆縦貫道の月ヶ瀬インターができて、そこから10分で行くことが可能になります。フットボールのドームがあり、多目的グラウンドが

あり、体育館、硬式野球場もある。他にも中伊豆ワイナリーには野球場や多目的グラウンド、狩野ドームはバドミントンのコートが約10面取れる。昔巨人の2軍が自主トレに来ていた土肥の野球場もあります。でも伊豆市だけではエコパにも御殿場にも、横浜にも勝てません。どうしたらいいか、伊豆市だけでなく伊豆の国市や三島市、東伊豆町などにあるスポーツ施設と連携し、美しい自然環境や温暖な気候、豊富な温泉、地元の海や山の多彩な食材、そして多種多様な宿泊施設を加えていくことです。伊豆全体としてみればスポーツツーリズムに適した環境が整っています。単なる物見遊山の観光から、生活満足度の一部としての観光ツーリズム、スポーツツーリズムを目指していきたいと思っています。

◆青山 使えるものは山ほどあり、それらが付加価値を生むということでしたが、全国で数多くの大会のプロデュースやキャンプ、合宿などを手掛けている脇田さんからみて、対象地としての伊豆の可能性はいかがですか。

アマチュア対象に宿泊型の合宿や大会 伊豆は立地、気候に恵まれ付加の魅力も

◆脇田 私どもの会社スポーツマネジメントはス



脇田英人氏

スポーツでもサッカーに特化し、プロではなくアマチュアが対象です。アマチュアのサッカー環境を整備してサッカーを日本に根付かせることを理念に活動しています。まずサッカー大会の主催ですが、すべて宿泊型で幼稚園児からシニアまですべてのカテゴリーで行っています。合宿は年間約500団体を取り扱っています。大会や合宿を通じてできた地域とのパイプを生かしたイベントの開催は年間約100件に及びます。スポーツをする、見るから言えば、スポーツをするという角度でスポーツツーリズムの仕事をしているわけです。

宿泊が絡んだスポーツツーリズムに伊豆の地域がマッチしていけるかを考える上での事例をいくつか紹介します。一つは茨城県波崎町（現神栖市）、グラウンドが50カ所約70面、宿泊施設18軒でキャパは約4000人。グラウンドは個人所有で宿泊施設の組合が運営しています。二つ目は茨

城県鹿嶋市の鹿嶋ハイツ、こちらは1企業が所有していて人工芝が5面あり、宿泊は約650人。波崎ほどの規模はありませんが、1企業がやっていますから判断が早い。もう一つ加えれば広島県福山市のビレッジは人工芝3面、宿泊棟3棟でキャパ約1000人。企業が単独で運営していますが、学校の廃校を利用した施設です。三つ目は石川県七尾市の和倉温泉多目的グラウンド。人工芝3面、フットサル場2面、ビーチサッカーコートなどがあります。グラウンドは自治体が所有し企業が窓口になってコントロールしています。施設は約7億円をかけて自治体が造りました。和倉温泉から徒歩で行けます。以上、大別した三つが全国的なパターンと言えるでしょう。

伊豆地域の可能性ですが、結論としてはありません。大きいのは気候。いくら芝生のグラウンドがあっても降雪地では半年しか使えません。次に立地。関東や東海から100^{キロ}、150^{キロ}圏で、合宿にはとても移動しやすい距離です。温泉や自然環境といった付加価値もスポーツをした後に、効果を発揮すると思います。

◆青山 J3参入が成るかどうかわからない時期かとは思いますが、山本さんは20年以上も子供、青少年のスポーツを通じた育成、普及と取り組んでいます。地域に根差したスポーツの振興・普及にどんなビジョンをお持ちですか。

東部にプロのサッカーチーム 近い将来のJ3参入を目指す

◆山本 まずアスルクラロという言葉の説明から。スペイン語で水色のことです。クラブカラーが水色ですし、クラブマークも青い空、青い海、富士山をイメージして作っています。これまで23年間、複合型スポーツクラブとして子供たちのスポーツ活動を中心に地域の皆さんの健康づくり、コミュニティづくりをサポートしつつサッカーチームの育成を行ってきました。

Jリーグは来シーズンからJ3がスタートしますが、東部からもプロチームを作りたいとJリーグに申請した際に思ったことが3つあります。その一つは県内の勢力図を変えること。私の子供のころ東部は弱いと言われ続けてきましたが、今は小学校、中学校のレベルではほぼ中部、西 負けられない力を持っています。ただ高校年代になると良い選手が流出してしまいます。例えば内田篤人、川口能活、高原直泰、小野伸二といずれも東部の人間ですが、出身がなぜか清水東、清水商（現清水桜が丘）になってしまう。東部に生まれた子は東部で育成し東部に夢のあるチームがあるとい

う状況を作りたい。2つ目は東部の子供たちはJリーグ、国際大会を行うスタジアムが地元がないため一流の試合を見る機会が非常に少ない。今回J3のスタジアムの条件が緩和され、愛鷹多目的競技場が使えることになりました。J3のゲームしか見られませんが、J-Q、J1に上がっていくことによって支援の輪が広がればスタジアム建設の機運が生まれると思います。3つ目はスポーツを通して地域を活性化していくことです。プロのチームになればメディアがこぞって取り上げてくれますし、アウエーのチームのサポーターが押し寄せてきます。この地域の知名度を高め、宿泊や食事、お土産などの経済効果が期待できます。J3の仲間入りができればと切に願っているところです。（※アスルクラロは来季のJ3参入は、かなわなかったが、JFLに昇格）

◆青山 傍士さん、欧州、例えばドイツでも人口2万人未満のまちがすごく多い。そんな町にもプロのホームチームがあります。その存在意義や地域への効果にはどんなことがありますか。

ドイツは人口3万以下でもプロチーム 子供たちの受け皿があり地元愛を育む

◆傍士 自分たちの町に地名が付いたプロという



傍士銑太氏

か大人のチームがあり、他の地域と戦う。子供心にいつか自分も、という思いが育っていきます。スポーツに限らず音楽、芸術も

そうです。地域にチームやオーケストラといった子供たちの受け皿があるからこそ地元愛が植えつけられ、この町で生まれ育ち生きていくという根っこができていくのだと思います。そして皆が皆、上を目指しているわけではなく、上にあがりたくない、ビジネスライクはいやだというクラブもたくさんあります。

◆脇田 日本ではアマチュアのトップを社会人のチームと見立てても、社会人から小学生まで一体化して活動しているところは少ない。まだまだ課題が多く、環境的に厳しい。

◆青山 菊地市長、伊豆市は2010年ごろから合宿場所からお弁当、練習場の確保などを一体化させたワンストップ型の誘致活動と取り組んでいま

す。点から面へと広域的な連携が必要ではありませんか。

日本よく知る海外の観光関係者 もはや単独誘客では通用しない

◆菊地 私どもの魅力プロジェクトは宿泊施設、スポーツ施設、お弁当、市内移動などを一元化したサービスです。これはこれで必要です。

広域連携の視点から紹介したい事例があります。先ごろ伊豆市で巨樹・巨木フォーラムがありました。初めて北海道から参加があり、九州からの参加者も多かったそうです。世界遺産になった富士山があるからです。スポーツツーリズム、東部・伊豆にとってきわめて大きな魅力になっています。

もう一つ紹介します。観光誘客で函南町と一緒にシンガポールに行きました。結論は単独で行っても戦にならない、太刀打ちできないことです。シンガポールの方は「私たちは富士山をよく知っている」と言い、具体的な地名や景勝地を挙げていました。特産品はワサビといったら「長野県でしょ」という答えが返ってきました。だからこれが修善寺、湯ヶ島ですといってもなかなか魅力を感じてくれない。駿河湾フェリー、河津桜、ダイビングもと伊豆半島全体に範囲を広げ、東京から1時間半で行けますと時間的距離の魅力を強調する方がいいでしょう。

スポーツで重要なのは天候。受け入れ側からいえば空振り防止になります。雨で予定の3日間もダメだったというケースも屋根つきのスポーツ施設があれば練習ができます。伊豆の市町が連携してそれぞれが戦略性や優位性を発揮できる施設を整備していく。この広域連携は絶対に不可欠だと確信しています。

◆青山 マーケティングの一環・プロモーションのあり方が出てきましたが、スポーツツーリズムに携わる脇田さんからマネジメントを含めて取り組み方を紹介していただけますか。

「だれに」「何を」「どのように」 ニーズ調査よりターゲットを絞れ

◆脇田 先ほど全国的に見て3つのパターンがあると申し上げましたが、茨城県波崎町の事例が一番分かりやすいと思います。ターゲットを絞る点では「どこの」は関東です。「だれに」はアマチュアのサッカー団体、そして「何を」は天然芝グラウンドを、「どのように」は合宿で利用してもらおう、ということです。一番大きかったのは天然芝の上でできることでした。それは距離や宿泊施

設のクオリティーなどを上回る商品力を持ちました。マーケティングの主流であるニーズを調べてアプローチをしてということよりも、どこのだれに何を、を明確にして動いたことが実績向上につながった事例です。

もう一つ挙げればグラウンドは個人が所有し宿泊・運営は組合というシステムです。サービスではできるだけ安い料金を心掛け、1泊3食の宿泊代が7035円、グラウンドは1日1面使用しても1万6800円。だれでも気軽に手ごろな料金で利用できるという面からアプローチしていきました。

◆**青山** 傍士さん、ドイツにはこういうスポーツツーリズムがありますか。

自然に人が動く流れをつくろう 地域密着型クラブづくりが必要

◆**傍士** たぶんドイツにはスポーツツーリズムという言葉はないでしょう。人が動く理由がすごく自然なんです。日本では環境とか観光とか役所的な言葉を使いますが、向こうの人は「おいしい空気を吸いたいから空気をきれいにする」、「きれいな水が流れている場所で過ごしたい、暮らしたいから川をきれいにする」。何とかのためという理屈が先ないと動きが取れない日本は補助金行政の悪弊かとも思いますが、ドイツはきわめて人間的です。日本人のスポーツはもっと人間的であった方が楽だと思います。

◆**青山** 人が動くのが自然という言葉聞き、冒頭で菊地市長がおっしゃった「ちょっとそこまで伊豆へ」とイメージ的につながるものがありましたけれど。

◆**菊地** 私も6年間ドイツにいましたが、確かにスポーツで誘客ってあまりないですね。日本で言えば人口が30万ぐらいになると文化的、スポーツ的な環境を含めてほぼすべての機能を備えています。3万3千人の伊豆市にすべての機能はいらなないけれど、伊豆半島全体でみればいろいろな機能がそろっています。伊豆半島の財産を皆で使う、補い合うことで、伊豆も負けちゃいけないぞと言いたい。

◆**青山** 山本さん、自然に人が動くという意味で地域に開かれたクラブの必要性がますます高まっていると思いますが。

◆**山本** 東部地域にプロのチームを作ることを軸に、スペイン語で仲間を意味するソシオの会員を募っています。目標は3万人、地域の皆さんに支えられた地域密着のクラブづくりを目指しています。クラブの役割はコミュニティの中核としていろいろな情報を発信していくとともに、単一種目

だけでなく多世代、多趣向、多競技のスポーツを楽しめる環境やプログラムを提供していくことだろうと思います。私のところでもスポーツ&カルチャースクール事業を立ち上げ、地域の指導者の協力を得て2、3歳児の親子体操から上はシニア世代のグラウンドゴルフまで健康づくり、コミュニティづくりの場を提供しています。関わった方々がソシオ会員となり、クラブを支えてくれています。クラブに関わる人が増えれば、個からグループ、グループから集団へと広がり、必然的に他との交流も始まっていくと思います。

ソシオ会員には地域の企業でサービスを提供できるカードを発行しています。会員が増え、サービス提供企業が増えればウィンウィンの関係が構築できます。その発展形でJ3の運営ができるようにしたい。ユニホームに入るスポンサー頼みではない地域密着型のクラブが生まれ、Jリーグの理念にも通じると考えています。

◆**青山** 菊地市長は広域連携、市町間連携が必須と強調されていますが、伊豆は一つと言いつつ実は一つずつだったのが現実で、なかなかまとまりませんでした。スポーツをテーマに広域連携の道を切り開くことができますか。

1人千円余分に消費で400億円 損得超え、今こそオール伊豆で

◆**菊地** 首都圏周辺には房総、三浦、伊豆と3つ



菊地 豊氏

の半島がありますが、山の最高峰を比較してみると、三浦は200m、房総は400mに対して伊豆は1400mあります。河川流域も狩野川は房総の最

長・夷隅川をはるかに上回ります。伊豆は多様な地形、自然環境に恵まれ、卓越した半島といえます。これは伊豆半島サミットで提案しようと思っているのですが、例えば伊豆半島で共有できるスポーツにサイクリングやマラソンがあります。横断、縦断でもいいし、海を見ながら、富士山を見ながらでもいい。コースが毎年変わってもいい。サイクリングやウォーキングはお金にならないという人がいますが、良く考えてください。汗をかければタオルを買うし、温泉にも入りたくなる。食事や宿泊の欲求も高まる。伊豆半島がまとまって

やることで価値が生まれます。減ったといっても年間4000万人が訪れていますから、1人1000円余分に使っていただければ400億円になります。うちに得か損かではなく、オール伊豆共有の利益になるということです。伊豆半島のランドデザインの重要な位置づけ、プラットホームにしたいと考えています。

一つの競技にターゲットを絞る必要はありません。伊豆に行けば多様な自然、地形があるように多種多様なスポーツが経験でき楽しめるということではないのでしょうか。それが我々、伊豆の在り様ではないかと思えます。

◆青山 いま菊地市長から1人1000円余計に使ってくれれば400億円になるという話がありましたが、脇田さんをご存知の中で付加価値のセールスがうまい事例はありますか。

◆脇田 私たちが取り組んでいるスポーツをベースにした地域ではあまり見受けませんね。逆に私たちの方から提案しているところです。波崎の場合は宿泊施設に泊まっていたためグラウンドを持ち、既に宿泊収入が発生しているので新たな付加価値を付けるという発想は希薄です。実際合宿で40万人が利用していますが、お土産屋さんには1軒もありません。

◆青山 傍士さん、ドイツでは地元チームのエンブレムとかをテーマにしたグッズ、記念品が充実していますか。

◆傍士 ドイツにいた時に、市長さんは外国から来た人のお土産をどこに置いているかを調べたことがあります。関心が高いのは絵葉書。自分たちはこんなところから来たということを示すまちの絵葉書です。自分のまちを愛する者同士ということで会話のきっかけにもなります。もう一つは紋章のついたペナント、壁に張ってあります。置物なんかはまず倉庫行きですね。日本から「お土産は何がいい」と聞かれたら絵葉書を薦めています。ホームステイの場合も喜ばれます。

◆青山 脇田さんのところでは伊豆への送り込みをしていますか。マーケットとしての可能性をどうみていますか。地元としては何から始めればいいのでしょうか。

既存施設を洗い出し、競技を絞り込む 交流拡大につながった施設整備と立地

◆脇田 一緒に仕事をしている宿泊施設はありますが、メインで動いている競技がサッカーですのでグラウンドの問題がネックです。別の競技に置き換えれば温泉であったり景色であったりと余暇を楽しむ要素が備わっていますから、スポーツツ

ーリズムが成立すると思います。スポーツをする人をサポートし、ツーリズムに反映させるという観点から言うと、どの競技をどの地域でやっていくかを絞る必要があります。それと既存の施設の洗い出し。まずハード面をしっかり把握して競技を絞り込み、既存施設の活用か新設かを決める。そしてどんなイベント、大会、合宿ができるのか、どのくらいのお客さんを呼べるのかといったソフト面を加味して具体策を検討していく。経験的には何でもやってしまうことによって薄れるよりは一つの競技に特化した方が話題性もありますし、多くの人が集まるようになれば知名度が高まり商品力も増します。

◆青山 スポーツツーリズムが成立するためには地元クラブチームの存在が大きい。対戦相手になるからです。小学生もいれば中学生も、そして社会人、シニアと充実していれば、大きな魅力になると思います。山本さんいかがですか。

◆山本 10年前にうちのクラブでフルピッチの



山本浩義氏

サッカー場、人工芝のグラウンド、テニスコートを造りました。すると強いチームも来てくれるんです。しかも場所は東名高速沼津インターから約

5分の距離。日帰りでもかなり遠くから試合に来てくれます。施設整備と立地条件が交流の広がりを生みました。同時に大会などが定期的に行われるようになり、クラブに関わる地域の人やチームが非常に増えました。グラウンドを造った効果大を実感しています。

◆青山 スポーツには人と人が交流する要素があります。交流資源は人材です。ツーリズムとなればなおさらと思いますが、菊地市長のお考えは。一つに絞って教えてください。

◆菊地 お客様が望むことと言えば、ちょっと古くなりましたが「おもてなし」でしょう。例えば夏の合宿、「昼の弁当で唐揚げが食えるか」と思われた経験があるでしょう。炎天下で汗をかいて泥だらけ、付添いの父母も汗だく。そんな時にどういう食事が喜ばれるか。試しに伊豆のコメで戸田か土肥の塩で結んだおにぎりにトマト、キュウリを出したところ大歓迎でした。

合宿誘致には強い練習相手が欠かせません。伊豆市の中学生の野球チームが真冬に山梨県と長野

県のチームを招いてワイナリーの人工芝のあるグラウンドで大会をやっています。真冬に練習や試合ができることを喜んでもらえるとともに強いチームを主催者側がセットすることで盛り上がります。

こうしたことが「おもてなし」。観光でありビジネスである以上はお客様のニーズに合ったメニューを準備させていただく。伊豆市が求めているところがございます。

◆**青山** きょうのパネル討論を総括する意味も込めて傍士さんにお伺いします。スポーツで伊豆が一つになることの価値や意義、それが成功するためのカギは何でしょうか。

伊豆をユニットで考え、使いこなす 都会主導ツーリズムから転換しよう

◆**傍士** 世の中のいろいろな事象を見て、これからの流れが何かをいつも気にしていますが、コンパクト化という流れが見えてきます。モノを買うにしても単一動機から多様の・複合的動機へ、一人を相手にするより家族、仲間をとということです。ですから菊地市長がおっしゃったように伊豆というユニットを使うことがすごく大事です。AKB48がなぜすごいのかというと、あの中の一人一人がものすごいから、全体がすごいということになると思います。その意味では中身・内容が重要になります。

スポーツと伊豆をどう結び付けていくかという課題もあります。まだイメージできません。見える化を図ってイメージが湧くようにしたい。例えば車で走っていると緑の芝生やグラウンドが目に入る。そこに人が集まっていればなおいいということですが、シンボリックにというか、ちょっとでも見せることができれば変わってくると思います。

それから日本にはなぜスキー場や海水浴場が国際保養地にならないかという視点から攻める手があります。伊豆は全部がそろっていながらもっとプレミアムなものを目指さないのかということです。携帯電話が繋がらないエリアにある宿なんていいじゃないですか。高い料金を払ってでも携帯がかかってほしくない人たちが来ます。あとは家族でスポーツが楽しめるのが伊豆とか、障害がある人も高齢者もOKとか。時代の流れにつながる複合型の展開はこれからだと思います。

伊豆がスポーツで一つになる意義は都会主導のツーリズムからの転換です。まずお金ありきで、お金で人を集め企業を集めてそこに文化を生まれさせるものでしたが、地域の文化を生かした地元主導のツーリズムを伊豆で実現してくれたらと期

待しています。

◆**青山** きょうはスポーツを軸にして伊豆の豊かな観光資源をもう一度見つけ直すことを前提に議論してきました。スポーツツーリズムを伊豆に浸透させていくためには人が自然に動くような環境



青山 茂氏

づくり、地域づくり、おもてなしといったことが根付いていく必要があります。スポーツ半島伊豆の実現には一つ一つやっていくことが大事です。菊地市長は伊豆半島サミットでサイクリングを提案されるそうですし、山本さんのアスクラロはJ3参入を目指してさらに開かれたクラブづくりを行っていく。そうした実績を一つ一つ積み上げるとともに、伊豆が持っているスポーツ資源を競技、施設、そして対戦相手などの人的資源を洗い出して組み上げていかなければなりません。まだスポーツツーリズム伊豆のイメージは希薄ですが、スポーツという視点から伊豆の観光資源をあらためて見直すことが活性化、再生への遠いようでいて実は一番の近道ではないかと感じました。

〈略 歴〉

◇パネリスト

■脇田英人 氏(わきた・ひでと)

1994年愛知国体でサッカー愛知県代表選手として全国3位となるが、じん帯断裂で翌年現役引退。以後アマチュアサッカーの環境整備に第二の人生を見出し、2000年都内にスポーツマネジメント(株)を設立。幼児からシニア・女子まですべてのカテゴリーで合宿、サッカー大会などを開き、年間約3000団体を扱う。1969年福島県出身。

■菊地 豊 氏(きくち・ゆたか)

1981年防衛大学校卒業後、陸上自衛隊入隊。防衛大学校教官、国連モザンビーク平和維持活動に携わる。在ドイツ日本国大使館防衛駐在官、第5普通科連隊長、内閣官房内閣衛星情報センター主任分析官などを歴任し、2007年一等陸佐で退職。08年伊豆市長、現在2期目。国際経験豊かな市長として活躍。1958年伊豆市(旧天城湯ヶ島町)出身。

■山本浩義 氏(やまもと・ひろよし)

青少年のスポーツ活動を中心に地域の「健康」と「コミュニティー」づくりを支援している。2013年沼津市にアスクラロススポーツクラブを設立。スポーツで地域を盛り上げたいとの思いからサッカーJ3への参入を目指している。アテネ五輪日本代表監督、ジュビロ磐田元監督・山本昌邦氏は実兄。1961年沼津市出身。

◇コーディネーター

■青山 茂 氏(あおやま・しげる)

オリエンタルランドを経て、現在シード取締役副社長。県内外の企業、自治体のプロジェクトプロデュースを手掛ける。ふじのくにしずおか観光振興アドバイザーをはじめ静岡県、静岡市、沼津市などの委員を務める。1952年栃木県出身。

柳生博氏が記念講演、 確かな未来は懐かしい風景の中にある －「花鳥風月の里山」を語る

「サンフロント21懇話会」（代表幹事・岡野光喜スルガ銀行社長）は12月18日、三島市のみしまプラザホテルで第19回全体会を開いた。会員の企業経営者や行政関係者ら約180人が出席し、俳優で日本野鳥の会会長の柳生博氏が「花鳥風月の里山」と題して記念講演を行った。

主催者を代表して大石剛静岡新聞社社長は「株高・円安により景気回復が進んだように見える。しかし福島第一原発事故や東日本大震災の傷跡はまだ癒えない。富士山の世界遺産登録や2020年の東京五輪開催決定など朗報もあった。来年は消費税の増税を控えているが、前向きに乗り切っていきたい」と述べ、懇話会活動へのさらなる協力と支援を呼びかけた。開催地と懇話会を代表してあいさつした豊岡武士三島市長は賑わいと品格のあるまちづくりを目指すガーデンシティの取り組みを紹介し、「地域の自然がまちづくりとどのように関係しているのか、興味深い」と柳生氏の講演に期待を寄せた。

柳生氏は祖父から花鳥風月の大切さを教わったことを強調し、八ヶ岳倶楽部のある八ヶ岳にまつわる思いや出来事、「野良仕事は野を良くする仕事」という数々の実践を紹介した。花鳥風月を「花は植物が花開くとき、鳥は動物の花だと思う。風は季節の便り、月は闇」と語った。後半ではガーデンシティと取り組む豊岡市長の登壇を促し、含蓄のこもったアドバイスを贈った。

主催者代表あいさつ

静岡新聞社社長 大石 剛

今年も残すところ2週間ほどとなりました。安倍首相の経済政策・アベノミクスにより、株高・円安で景気回復が進んだような状況にありますが、一方で福島第一原発の事故・東日本大震災の傷跡はまだ癒えず、県内に避難してきた被災者は千人余りいます。忘れてはならない現実だと考えます。来年は4月に消費税の増税があり、若干の先行き不安を抱えてはいますが、今年には富士山の世界遺産登録や東京五輪の開催決定などの朗報を聞くことができましたので、この前向きな気分を生かし、強い日本の復活につなげていきたいと思えます。

本日はサンフロント21懇話会の本年度活動方針の一つに掲げる「県東部地域再生に向けた都市づくり支援」のうち、まちづくりに花を取り込んだガーデンシティを中核に位置づけ賑わいと品格を備えたまちづくりを目指している三島市を会場とさせていただきます。記念講演は皆さまよくご存知の俳優であり、日本野鳥の会会長を務める柳生博様にお願ひしました。まちの活性化にたくさんのヒントがいただけるものと期待しております。

開催地・懇話会代表あいさつ

三島市長 豊岡 武士

三島市は富士山からの贈りもの・雪解け水が随所に湧（わ）き出してせせらぎを形成し、楽寿園とか三嶋大社の緑があります。そこに花を加えて美しく品格のあるまちをつくろうということでガーデンシティと取り組んでいます。かなり成果も出てきました。来年5月31日と6月1日には全国花のまちづくり三島大会の開催を予定しています。皆様には今後ともご理解ご支援をお願いいたします。

東部地域は昨年の新東名の開通、来年2月の東駿河湾環状道路と伊豆中央道の連結で利便性が高まり、さらに圏央道が開通すれば北関東からのお客さんが期待できるという状況にあります。東部地域は今、富士山の世界遺産登録、2020年の東京五輪も含めて国内外のお客さんを多数受け入れて発展していかなければならない重要な時に入っています。

そんな中でサンフロント21懇話会の果たす役割は重要性を増していると思います。懇話会の発展とともに、関係する市町が一体となって東部地域をますます光り輝く地域としていくことを願っています。

記念講演

「花鳥風月の里山」

俳優、日本野鳥の会会長

講師 柳 生 博 氏



須走は野鳥の会の原点、なじみ深い県東部

早々と三島に着きました。おかげで源兵衛川に久しぶりに会うことができました。まだ体力があるころには「柳生博 何とか何とかに行く」とかいう冠の番組をたくさん作らせていただきましたが、その時にサポートしてくれたのが「沼津かもしかアルパインクラブ」という沢歩きでは日本有数の登山隊です。撮影を終えて戻ってきた時に味わう沼津港の焼き鳥屋のおばちゃんの焼き鳥は格別でした。富士川を渡った先にある清水では大学

時代を過ぎました。東京・越中島にあった東京商船大学（現東京海洋大学）が進駐軍に接収されて清水に引っ越したのです。清水では腕白の限りを尽くしました。それから御殿場の須走（小山町）は約80年前、日本野鳥の会が初めて探鳥会を開いた場所です。中西悟堂という素晴らしい男が柳田国男、金田一京助・春彦、北原白秋ら芸術家、文化人、学者といった日本のリーダーたちに声を掛けて活動したのです。僕は野鳥の会会長を引き受けて10年になりますが、一番最初の行事が記念すべき須走の浅間神社境内に石碑を建立することでした。そんなわけでこちらに来るとなんだか故

郷に戻ったような気になります。本当にお世話になっています。

確かな未来は懐かしい風景の中にある

きわめて個人的なことをいくつか話します。76歳です。もう確かな未来というものも短くなってきました。僕はこんな調子ですから挨拶ではなく乾杯の音頭を頼まれることが多く、いつも「確かな未来は懐かしい風景の中にあります。乾杯」と言います。懐かしい風景って何でしょう。たくさんの人と全国の人と共に、あなたの町の懐かしい風景って、あなたの地域の懐かしい風景ってどんなものなのということをもう一回考えてほしいからです。小さなことですが、八ヶ岳の主峰・赤岳の麓、標高1350mの地点にギャラリー・レストラン八ヶ岳倶楽部があります。年間10万人、いやそれ以上の人が訪れてくれます。そこに30数年かけて森を作ってきました。倶楽部の社是は「儲けるな 美しくあれ 柳生博」です。なぜそんなものを作ったか、触れていきます。

一躍売れっ子 環境の激変に悩む

僕はNHKの朝の連続テレビ小説「いちばん星」（1977年、昭和の流行歌手第1号・佐藤千夜子の半生を描く）で一躍、有名になりました。演じたのはあの「赤い靴 履いてた 女の子〜」を作詞した野口雨情、作曲の中山晋平役は津川雅彦さんです。あっという間に仕事が増えるようになりました。年間で600本から多い年は700本の仕事があり、毎日どこか2カ所でやっている計算です。すごかった。

そして何が起きたか。かみさんも含めてしゃべることが大好きなおしゃべり夫婦は多忙の余りおしゃべりの機会が極端に減りました。一番切なかったのは子供たちへの影響です。もともと子供と遊ぶのが大好きで、キャンプにもよく出かけていました。それが全然できなくなってくる。そのうち子供が「お前の父ちゃんは一」といじめを受ける。それで「壊れていく、ああダメだ」と思うようになりました。そんな時、うたた寝をしている僕の前に突然祖父が現れました。すごく優しい声で「博、いつも言っている野良仕事をしなさい」と言うのです。野良仕事、野が良くなる仕事か。じゃあ何をやるかと思った時に真っ先に浮かんだのが八ヶ岳のふもとを走る小海線でした。13歳で一人旅をして大事な時を過ごし、その後も進路とか結婚、仕事など物事を決める時にはいつも小海線に乗っていました。沿線の甲斐大泉駅には僕の木がありました。マイツリーです。誰かに相談

するよりもまず木に相談するわけです。こちらの三嶋大社にも立派な木がたくさんありますが、年輪を重ねてきた偉大な大きな木には何かが宿っていると思います。まず抱っこする。何もしゃべってくれなければ後ろ手に。そうするとしゃべってくれます。

稼ぎと労力注ぎ、沈黙の森を再生

それで八ヶ岳に行きました。人工林になっていました。標高1000m前後はスギ林、それ以上はカラマツ林です。かつては花が咲き、鳥が歌っていた森は花も咲かなきゃ虫もいない、従って鳥もいない「沈黙の森」と化していました。

当時はキムタク（木村拓哉）ばりの売れっ子でしたから、コマーシャルにも起用されます。そのコマーシャルのギャラで荒れ果てた沈黙の森をいくつか買いました。木を切り、林床（地面）に光を当て、風を通す。そうすると1年も経たないうちにスマレが出てきました。それから僕が木を切ったり植えたりしていると周りに鳥たちが集まってきました。「なんて僕は鳥に好かれるんだろう」と喜んでいたら、鳥に詳しい人が「柳生さんがつなぎを着てスコップを持って出てくると、虫が見つかることを鳥たちが学習しているからだよ」と教えてくれました。

八ヶ岳倶楽部は年が明けて25周年です。なぜそういう店を作ったかということ、雑木林を作り始めて10年ぐらいたった時、朝カーテンを開けるとダークスーツを着てネクタイを締めた人が30人ぐらい立っています。行政の見学が増えてきました。イケイケドンドンでやっていた人たちが足元を見直し始めたからです。自分の家族を、近くを流れる川を、荒れた山を、数を減らした鳥に目を向けるようになった。だから見学者が増えてきたのです。

それでまた「壊れていく」と思うようになりました。息子（柳生真吾）は農学部の林学を出たのですが、学生と一緒に教官も来るようになって「大学の演習林でやっていることとは違うじゃないですか、先生」みたいなことにもなった。僕としてはもう勘弁してほしい。家族会議を開きました。息子が「これだけあるのだからどこか1カ所開放し、そこは誰でも入っていいよという森にしよう」と提案し、そうすることにしました。僕は森を作っている時「山火事だけは出すな」と村人にきつく言われていました。たき火が好きで作業が一段落すると、枯枝などを集めてたき火をしていたからでしょう。標高1000m以上の山では火が土の中を走ります。腐葉土がいっぱいあってなかなか土にならない。消したつもりでも何時間か後に

10分も先でポッと火が上がる。そうやって山火事は起こります。そこで石を集めて炉を作り、土の中を火が走らないようにしました。そうした上でたき火をしながら飲んでいきます。「酒なくてなんの己が野良仕事」という境地です。

でもパブリックスペースとして開放すればたき火をする人もいるだろうし、たばこのポイ捨てが心配になります。「監視小屋が必要だ」という話になった時、ガラスとか金属の作品、木彫に興味が有り、作家の作品を集めていたかみさんが「収集品を展示するとともにアーティストの発表の場にしよう」と切り出しました。ちょうどバブルがはじけて絵などが売れなくなっていた時代です。ちょっとは役に立つかなと思いました。監視の役目もしながら作家を売っていくことになりました。僕が営業部長ですから売れました。その年の忘年会では成功を喜び合い、うれし涙が出ました。それから25年、全国からたくさんの方が来てくれます。最初は3人だった作家も今は70数人います。

「野良仕事だよ、花鳥風月だよ」。祖父から学ぶ

大きな話に移ります。野鳥の会のことです。皆さんは鳥の6割以上は国境のない渡り鳥だということをご存知でしょうか。今来ている冬鳥たちはだいたいロシア、大陸で繁殖が終わって氷雪で食い物がなくなり、日本まで4000^{キロ}、4500^{キロ}と飛んできます。そして春になり北の大地に虫や魚などヒナに与える餌が湧いてくると一斉に日本を飛び立ち、北帰行を始めるわけです。入れ替わるようにしてツバメがやってきます。今、ツバメはミャンマーだとかカンボジア、タイ辺りにいます。なぜそこで繁殖しないか、密林はあっても餌がない。それよりも日本の里山に来ると餌だらけです。3月の半ばから末には3500^{キロ}、4000^{キロ}をあの小さい体でやってきます。そして日本人の家の軒下、それも人の出入りする軒下に巣を作ります。田んぼや泥んこ道の泥と枯れ草や葉っぱを一緒にこねて巣を作るのです。それは千数百年前からという文献もありますが、何百年に及ぶ里山の極めて普通の風景です。

もう10何年か前になりますが、長い間「生きもの地球紀行」というNHKのドキュメンタリー番組に携わり、世界各地の生き物たちをそーっと覗き見してきました。たくさん生き物、たくさん地域、そこに暮らす人々とかかわりや文化を通じて多くのことを感じましたが、行きたびに思ったのは「日本ってすごいな、日本って変わった国だな」ということでした。どういう意味か、分かりやすく言うと夏から秋に移る時、コオロギとかいろいろな秋の虫の音色が聞こえてきます。日

本人だとしみじみと「ああ秋だなあ」という話になりますが、海外ロケの現場は多国籍です。秋に虫の話をした際に居合わせたフランス人とイギリス人の友人に聞いたら「ノイズ」「ノイズだ」と言うのです。腹が立ちましたけれど、しみじみとか風情とか、そういうものは世界中の人が感じるのではなく日本人の特長のようにです。僕は爺（じい）さんによく言われました。「博、野良仕事だよ、花鳥風月だよ」と。

花は分かりますね、植物が花開く時です。こちら（三島）では花いっぱいガーデンシティを作ろうとしています。それでは鳥って何でしょう。鳥は動物の花だと思えます。ツキノワグマなど野生の哺乳動物や水の中に棲（す）む魚は動物園や水族館といった特殊な所でしか目にすることができません。日常的に目にしたり耳にしたりするのは何か、鳥です。子供たちにとっては虫ですね。

うちには孫が7人います。八ヶ岳で寝ていた時、朝早くに一番下の小学校1年生の子が「爺じ、カサコソしようよ」と起こしに来ます。カサコソって落ち葉の上を歩くことです。夏でも落ちています。子供はわざと転びます。そこで落ち葉をかき分けるとダンゴムシやミミズを発見します。この子が大好きなのはミミズ、大きなミミズで腕輪を作り、首輪にしたこともあります。僕がいう懐かしい風景です。やがてその子が成長して恋をするようになります。そうすると、冬鳥、水鳥たちを見てロマンをかき立てる。ロマンスも生まれます。恋人がいればなおさらです。万葉集にもそういう歌がいっぱいあるでしょう。三島市長の豊岡さん、ガーデンシティには鳥のことが全然書いてないけれど、こういうことも加味しましょう。

13歳の一人旅が今につながる

テレビやラジオ、新聞などでもうご存じかもしれませんが、僕がなぜ八ヶ岳に住み、野良仕事をしているかについて話します。柳生の家にはいくつかの家訓があります。その一つが13歳になると、今の中学2年生の夏休みに1カ月近く帰って来るなど家を追い出されます。一人旅は兄もおじさんも皆やっていました。僕は初め三島から富士宮、御殿場あたりでうろろうろしようと思った。富士山の反対側、富士五湖周辺も考えた。しかし親父が富士講に入っていて、いつも富士山を拝んでいるような男だったので、富士山の麓からは離れたいと思えました。地図をみると富士山を真北から見る八ヶ岳が目にとまった。良い具合に標高1000^{メートル}前後で八ヶ岳を半周している高原列車の小海線がありました。聞き調べるほどにそこは開拓の人たちの場所であり、終戦後の大きな変化の中で外

国人も来るし、有名大学は出たけれどというインテリたちもいた。僕は車で泊まったりしながら1カ月を過ごしました。世の中を変えるんだという人たちにも接していろいろなことを教わりました。

柳生の家は霞ヶ浦近くの地主でした。小作人の稼ぎをポケットに入れる西洋の地主とは違って、日本の里山の地主は里山を管理し、維持する役割を担います。里山には田んぼがあり畑があり、農業用水路として作った小川があり、雑木林と集落があります。4点セットです。関東の雑木林にはクヌギとかクリ、コナラが多い。例えばクヌギが成木になるには17年から18年掛かります。伐採した木は炭や薪といったエネルギーとなり、落ち葉は肥料として使います。伐採後に出てきたわき芽は株立ちにして育て7年から18年経つと切ります。持続可能な社会が成り立っていました。今竹が氾濫しています。竹は使ってなんぼのものだから使わないなら切ってください。畑や山を侵略し、やがて森の木をダメにしてしまうでしょう。竹はある時期になると一斉に枯れます。その時の光景は目にしたくない。皆さんもそう思いませんか。

僕は祖父が大好きで、小さいころはよくついて歩いていました。なんたって柳生ですから、剣道七段教士かな。いやあと気合を入れると近くで遊んでいるニワトリがひっくり返り、上を向いて気合を入れるとスズメが落ちてくる。かつて僕たちの周りにはそんな裂帛（れっぱく）の気合いを持っている人たちがいました。我々はどうでしょう。胸に手を当てて考えてみると、僕は結構清い生き方をして来て清い野良仕事をしていると思っていますが、祖父のレベルには程遠い。皆さんも育て育んでくれたおじいさん、おばあさんにかなり劣るものがありますか。特に花鳥風月に関しては。

「風」は便り、「月」は闇

風（ふう）って何でしょう。便りだと思います。季節の便り、国境を持たない野鳥は、ジョン・レノンの名曲「イマジ」のイメージにぴったりだと思いませんか。風は便りであり季節の移ろいです。その便りを感じながら野良仕事、野が良くなる仕事をする。例えば今、八ヶ岳に行ったら乾いた音がします。室内に入るとパチパチと火がはじける、薪がはじける音がします。そうした音が伝わり、そこはかたく感じるものがある。湿っぽくなってツバメが来た時もそうです。ああ日本中で田んぼに水を入れているんだ、田んぼの水が暖かくなるから水生昆虫が動き出し、飛び上がるものもいる。ツバメはそれを取ってヒナを育てる。こういうことに思いを至らせる、これが花鳥風月

の風だと思います。

月（げつ）、これは闇だと思います。八ヶ岳に住もうと思った時、家族に賛成か反対かを尋ねました。皆反対です。「じゃあ俺一人でもここに住む」というかなり強引な父親ですが、東京で設計図を引いて家を建てるようなことはしません。必ず現場に行って少なくとも10日間は女房と子供4人の計6人でテント生活をします。何のためか。そこの生き物たち、植物や動物、そして文化や歴史、神々に失礼があってはならないと思うからです。

これまでは経済的合理性が優先され、少々生き物や自然に対して失礼があってもどこかで償えばいいという考え方がありました。でも今は違います。野鳥の会は「原発事故の被災地を訪ねる」というツアーを行いました。結構高いツアーでしたが、あっという間に満杯になりました。南相馬市や飯館村、浪江町など被災地の現状といっても野鳥の会ですから、鳥たちはどうしているかがテーマです。ツバメの姿を追っていくと、南相馬では飛んでいましたが、浪江は1羽も飛んでいない。バスの中で「なぜだ」という話になりました。専門外の人が「田んぼを作っていないからだ」と正解を言う。耕作禁止区域外に出ると田んぼがあり、ツバメが嫌というほどいる。そうすると、懐かしい風景ってすごいことだなということが分かってくるわけです。

ツバメは日本の里山のシンボルマークです。バジにもしています。残念ながらその数は減っている。耕作放棄地、荒れた田んぼが増え、糞害に憤慨した人からは巣を作る軒先を追われるなどして一緒に住める環境が失われているからです。

主体は住民、トコロジスト。行政は褒め役に

ここでご当地三島の豊岡武士市長に登壇してもらいます。講演前にちょっと話をしましたが、豊岡さんはガーデンシティとして壮大なことを考えています。でも僕から見ると、まだまだ初心者です。皆さんも一緒に考えていきましょうということで登壇してもらいます。

◇**豊岡市長** 「確かな未来は懐かしい風景の中にある」ということで、示唆に富むお話を頂戴しましてガーデンシティの取り組みも、もっともっと深めていかなければ、と思っています。三島には大勢のトコロジスト（その場所の専門家）がおり、川の掃除、ゴミ拾い、田んぼへのレンゲ植えなど多彩な取り組みを展開しています。それらをベースにして、花はガーデンシティのシンボルとして考えているところです。今後ご指導いただければ幸いです。

◇**柳生** シンボリックな話をします。僕は目黒区の大岡山に住んでいます。隣町の自由が丘は三島とは比較にならないほど花いっぱいです。大きなプランターでやっています。その中にはあなたたちが植えている花とは違ったものがある。花の咲く木、実の成る木です。

丘ばち（蜂）って聞いたことがありますか。自由が丘の蜂なんだそうです。いくつものビルで養蜂活動をしている。最初のころは蜂が遠方から蜜を運んできた。「だったらこの町で蜜をとってよ」と商店街のおやじさんたちが花の咲く木を植える活動に乗り出しました。自由が丘丘ばちプロジェクトです。花が咲き実が成ると鳥が増える。餌になる虫もいる。鳥たちが害虫も含めて取ってくれます。自由が丘には有名なスイーツの店がたくさんあり、自由が丘でとれた蜂蜜を使っています。「きょうは丘ばちの日です」ともなると行列ができます。

◇**豊岡** 商店街の皆さんに自主的に取り組んでもらえるようなことがあればお願いしていきたい。

◇**柳生** 肝心なことは行政がやれと言ったのではなく市民がやっている点です。行政はそれを聞きつけて「すごいね、そうか」ってほめに行けばいい。もう一つ例を挙げましょう。ある区で小さい公園の隣地が手に入り、どういう公園を作りたいか、市民アンケートをしました。全員が欲しいと言ったのが何と原っぱ。周辺には小さい子供を抱えた家庭が多かった。どんな原っぱにするか、その場所の専門家であるトコロジストたちは考えました。3つに区分けしました。一つは普通に草刈りをする、もう一つは30％から40％の草丈にする、残りはいっさい手を付けない。するとそこにいる虫たちの数、種類が多様になった。刈り取った草は堆肥にするため積み上げて置く。その枯れ草の山が子供たちのジャンプの場所になる。そういう場所があるなら子供は遊びたいから。こういうことも考えたい。

それから三島には養殖じゃなくて自前で生きているホタルがいるんだってね。うらやましい。実は目黒区の駒場に昔西洋人が日本の田んぼを研究するために作った棚田風の田んぼが残っていて、そこでホタル自生の取り組みが行われています。2,3匹は大丈夫だけど、どうもうまく進まない。何ででしょう。餌のカワニナがないのではなく、小川をU字溝にしちゃったからです。早瀬とか淀みがなくなった。八ヶ岳でもそうです。石ころを積んで作った小川は光の渦になります。

だいぶ前になるけれど、宮崎県と大分県の地境でゲンジボタルの撮影をしました。そこで感激したのは村の人たちの優しさです。小川があって近くを道路が走っている。何をしたか。刈り取った稲を掛けるハザを使って毛布とかコートをかけて

車のヘッドライトを遮り、求愛の信号である光がちゃんと通じるように守ってやっていました。

ジオパークは素晴らしい。継続的な教育を

昨年、伊豆半島が日本ジオパークに登録され、世界ジオパークを目指していると聞きました。富士山から伊豆大島、八丈島と続く日本列島の息遣いが世界に認められる。素晴らしいことです。三島には富士山の湧水がある。そこにどんな生き物たちがいるのか、皆で大事にしていきたい。

最後に言いたいのは継続的な教育です。目黒区のある小学校には優れた教育者が歴代いまして、校庭の一角にもともと関東に生えていた木を植えてきて立派な雑木林を作った。新しい子供たちは穴を掘ってビニールシートを敷き、水を入れて落ち葉を加える。そうしたらヤゴとかが出てきます。水生生物の宝庫になり、それを研究する人たちも現れた。僕はコウノトリのファンクラブ会長もしているのだけれど、「生きもの地球紀行」の時に、兵庫県の北の方に田んぼの水生生物を調査しています。もう10年以上続き、単なるヤゴではなく、これはシオカラトンボ、これはオニヤンマと見分けられるようになってきました。こういうことをやっている学校が分かったら褒めてやってね。

◇**豊岡** 三島にも同じようなところが作ってあります。ビオトープをやっている学校もあります。山田川には自然の里があり子供たちや家族連れが遊びに来たり、仕事をしに来たりしています。

◇**柳生** 締めは日本野鳥の会のPRです。ホームページを見ていただくと会報誌「野鳥」、フリーマガジン「トリノ」やガイドブック、図鑑を紹介しています。これらを読んで勉強してください。学びは楽しいものです。そして地域の、自分が散歩する道すがらにどんな生き物たちがいるか確認してみてください。季節がありますからいつでも同じ虫がそこにいるわけではないし、先ほど言ったように鳥の6割は移動している。季節とか時間、場所の情報を連絡し合うといい。もっと広がろうと思ったら野鳥の会に入会することをお勧めします。

〈 略 歴 〉

■柳生 博氏(やぎゅう・ひろし)

1937年、茨城県生まれ。茨城県立土浦第一高校から東京商船大学(現東京海洋大学)に進むが、視力の低下で船長の夢を断念し中退。俳優を志し、俳優座養成所に入所。61年映画「あれが港の灯(ひ)だ」(東映)でデビュー。朝のテレビ小説「いちばん星」(NHK)の野口雨情役で一躍、脚光を浴びる。「生きもの地球紀行」(同)の出演、ナレーションで活躍。

私生活では山梨県八ヶ岳南麓(北杜市大泉町)にアトリエを建て30数年。荒れた人工林を原形の雑木林に戻すため広葉樹、落葉樹を中心に1万本以上の雑木を家族とともに移植し、その林の一部を開放している。年間10万人以上が訪れる。コウノトリ ファンクラブ会長も務める。著書に「八ヶ岳倶楽部『森と暮らす、森に学ぶ』」などがある。

ラジオマイトーク

【平成25年11月24日放送】



愛されるプラサヴェルデにしたい

た なか のぶ ゆき
田中伸幸氏

コングレ・コンベンション静岡グループ
プラサヴェルデ館長

▽モットー 何事も自然体で

▽趣味 テニス、六大学野球観戦

▽出身地 新潟県

〈お話のポイント〉

♠ JR沼津駅北口に今年7月オープンした総合コンベンション施設「ふじのくに千本松フォーラム」（愛称・プラサヴェルデ）の指定管理を行っています。現在は東京ドームのグラウンド部分と同じ規模の展示場と、その2階に500平方メートルの市民ギャラリーが稼働しています。

♥ 来年8月には1100人収容の大ホール、700人収容の中ホール、それに100~200人の大小会議室など合わせて12室になります。駅に近いことが売りです。展示場、会議室、

ホテルがコンパクトに配置され、雨にぬれずに移動できます。

◆ 音響にもこだわりました。展示場の床はコンクリートなので搬入、搬出はスムーズになりました。何にでもご利用できます。われわれが使い方を考える以上に、お客様からこんな利用の仕方があるのかと教えられます。

♣ おもてなしも大事ですが、安全で安心して参加していただけることが運営上重要で、そのために決まったことをきちんと守れることです。地元で愛される施設にしていきたいですね。

ラジオマイトーク

【平成26年1月19日放送】



紙でもない、フィルムでもない新製品開発

み さわ きよ とし
三澤清利氏

特種東海製紙(株)
代表取締役社長

▽モットー まず実行、失敗しても経験が残る

▽趣味 読書

▽出身地 長泉町

〈お話のポイント〉

♠ 特種製紙と東海パルプが2007年に共同持株会社を設立し、10年に持株会社が2社を吸収合併して誕生した会社です。特種製紙は330種の「日本初の特殊紙」を開発してきました。一方、東海パルプは段ボール原紙や家庭紙が主体です。

♥ 今後、既存の紙を追いかけても構造変化を乗り越えられません。得意の技術であるセルローズ（繊維）を生かして、紙でもなく、フィルムでもない、新しいものを作りたい。現在、島田の工場に大型のテストプラントを建設中で今年中には

試作品ができると確信しています。リチウムイオン電池のセパレーターに転用できないか、マーケットを模索しながら、開発しています。

◆ 18年間の単身赴任で感じたことは、富士山などの自然のほか、高速道路、新幹線、空港、港湾など、これほどハードウェアに恵まれた県はありません。潜在的可能性は高いと確信しています。

♣ 労使交渉、総会屋対策などを通じて学んだことは、逃げないこと、信頼することです。信頼があれば何事もクリアできます。

ラジオマイトーク

【平成26年3月16日放送】



富士山満喫の東駿河湾環状道路

おお ぎ けん いち

大儀 健一 氏

国土交通省中部地方整備局
沼津河川国道事務所長

▽モットー 地域のために

▽趣味 サイクリング

▽出身地 千葉県

〈お話のポイント〉

◆ 東駿河湾環状道路の三島塚原インターと函南塚本インター間6・8キロが今年2月に開通し、東名、新東名から環状道路を経て伊豆中央道、修善寺道路を通過して伊豆市大平まで30分で行けるようになりました。

♥ 全線で富士山がきれいに見えます。函南町にある高架橋は1キロに渡り継ぎ目がなく、カタン、カタンという音がしません。日本一長い継ぎ目のない高架橋です。沼津から下田までの伊豆縦貫自動車道計画も大平の先でトンネルの工事をしています。全線開通は夢物語ではありません。

せん。

◆ 開通を機に伊豆の13市町や観光協会、県、道の駅と河川国道事務所が一体となり、スマホ向けに「ナビする伊豆の旅」情報を配信中です。50の春の花スポットや100のおススメ情報を提供しています。

♣ 街中をゆったり流れる狩野川は沼津の顔です。あゆみ橋から御成橋までの護岸が整備され、風のテラスに見立てオープンカフェ、ステージイベント、カヌーの川遊びスポットにして、街中の活性化に結び付けたいと思っています。

ラジオマイトーク

【平成26年5月11日放送】



観光ハブ都市構想を推進

わか ばやし よう へい

若林 洋平 氏

御殿場市長

▽モットー 義理と人情

▽趣味 スポーツ全般
(特に野球、ゴルフ、釣り)

▽出身地 茨城県

〈お話のポイント〉

◆ 富士山が世界遺産に登録されて、ほぼ1年。市民の皆さんの意識が大きく変わりました。特に町をきれいにしようとする意識が非常に高まってきました。清掃ばかりでなく、花を植えるなど、さらに磨きがかかっています。

♥ 富士山がきれいなのは当たり前。町をきれいにし、心まできれいにすることで、来訪者におもてなしの心が自然と出てくると思っています。6月28、29の両日に富士山樹空の森(御殿場市)で富士山フェスタを開催します。

◆ 御殿場を核にした観光ハブ都市構想を推進

しています。観光を面で考えています。富士五湖、箱根、熱海、伊豆半島のちょうど真ん中、地理的優位性を考えれば富士五湖から御殿場に一度寄ってから伊豆方面に行く、逆に伊豆方面から御殿場に、いったん立ち寄ってから富士五湖に行くような役割を担いたい。

♣ 2019年にラグビーのワールドカップ、20年には東京オリンピックが開かれます。御殿場は広大な土地、きれいな水、空気、景観を提供できます。開催に一役買えればと思っています。

サンフロント21懇話会の会員情報

■新たに入会された方

◇静岡県賀茂危機管理局	局長	小川 幸弘
◇静岡県東部危機管理局	局長	佐藤 一彦
◇沼津開発興業(株)	代表取締役	河西晋二郎
◇ダイワロイネットホテルぬまづ	支配人	井上 靖
◇(一財)静岡経済研究所	主席研究員	塩野 敏晴
◇(株)太平エンジニアリング沼津支店	執行役員支店長	山本 信行
◇揚野法律事務所		揚野江利子

■会員の変更

◇富士市	市長 鈴木 尚 → 市長 小長井義正
◇裾野市	大橋 俊二 → 市長 高村 謙二
◇静岡県熱海財務事務所	所長 古川 敏男 → 所長 片野 光男
◇静岡県熱海土木事務所	所長 田中 宏明 → 所長 森田 尚孝
◇静岡県賀茂地域政策局	局長 鈴木 雅春 → 局長 菫澤 敬
◇静岡県賀茂農林事務所	所長 山本 修 → 所長 志村 弘一
◇静岡県下田土木事務所	所長 平野 忠幸 → 所長 安達 行彦
◇静岡県田子の浦港管理事務所	所長 藤浪 哲也 → 所長 桜井 孝洋
◇静岡県東部健康福祉センター	所長 梶 充伸 → 所長 池谷 洋一
◇静岡県東部地域政策局	局長 森 貴志 → 局長 滝浪 勇
◇静岡県沼津土木事務所	所長 増島 康行 → 所長 石塚基一郎
◇静岡県富士財務事務所	所長 植田 康大 → 所長 田代 恵子
◇静岡県富士土木事務所	所長 堀野 徹 → 所長 西谷 誠
◇静岡県富士農林事務所	所長 塩坂 幸信 → 所長 竹林 圭介
◇沼津リバーサイドホテル	総支配人 齊藤 研一 → 顧問 齊藤 研一
◇スルガカード(株)	代表取締役専務 澤野 幸男 → 代表取締役専務 田子 博英
◇日本大学国際関係学部	学部長 佐藤 三武朗 → 学部長 渡邊武一郎
◇住友生命保険相互会社 沼津支社	支社長 永橋 克介 → 支社長 寺崎 啓介
◇静岡放送(株)	ラジオ局長 村松 良道 → ラジオ局長 漆畑 昌宏
◇(株)電業社機械製作所	相談役 渡邊 昌信 → 代表取締役社長 土屋 忠博
◇(株)MYコミュニケーションズ	代表取締役会長 須田 徳男 → 代表取締役社長 須田 哲司
◇富士通(株)沼津工場	工場長 三津濱 元一 → 工場長 阿部 欣成
◇三島函南農業協同組合	代表理事組合長 山田 壽次 → 代表理事組合長 柿島 直人
◇スルガコンピュータサービス(株)	代表取締役 高柳 和弘 → 代表取締役 佐野雄一郎
◇(株)静岡新聞社	取締役社長室長 渡邊 治彦 → 取締役社長室長 大須賀紳晃
	取締役編集局町 大須賀紳晃 → 編集局長 植松 恒裕
◇国土交通省中部地方整備局沼津河川国遊事務所	事務所長 大儀 健一 → 事務所長 野坂 周子
◇沼津埠頭(株)	代表取締役 大村 義政 → 代表取締役 長島 郁夫